
氷の華 ~ 誓約のノクターン ~

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の華　～誓約のノクターン～

【Nコード】

N8778P

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

高校を卒業した私たち。

二人そろって県外と同じ大学を受けた。

彼女は私の傍にいたいからと。

だけど、それがきっかけで、全てが始まる。

幸せと平穏を願う私たち。

だけど、現実を決して私たちに優しくはなかった。

——今の私がいこうなってしまった全ての原因は……——

―私は、そんなあなたが……―
明かされる事となる彼の真実。
ここに、氷の華、完結。

作者の消えた未熟な魔術師のお店というサイトの小説を再アップしたものです。

プロローグ（前書き）

第二部開始です。

ブログ

それは私が小さな頃だった。

まだ何も知らない無知な頃の私だった。

人を信じ、人を愛していた頃の私だった。

ただただ、何も考えずに居た頃の私だった。

その頃の私は、初めて現実を見た。

とても悲しい現実だった。

自分が一人だと知った。

誰も自分を見てくれていないと知った。

誰も自分を守ってくれないと知った。

誰にも愛されていないと知った。

愛されるような自分で居ないと誰も愛さないと知った。

親に愛されるには、自慢の息子で無くてはならず。

妹達には、頼りになる、強い兄では無くてはならず。

クラスメイトには、人がよく、使い勝手のいい学友で無くてはなら

なかった。

だから、私は姿を変えた。

少しずつ、姿を変えていった。

そして、高校の時に完成した。

そこには、完璧な私がいた。

誰にも嫌われない私だった。

誰にも否定できない私だった。

けれど、それと同時に、誰にも愛されなかった。

誰にも肯定されなかった。

私は、いつしか、方向性を間違えていた。

臆病な私はいつの間にか、間違えていた。

私は、臆病な私は、嫌われることを恐れていた。

拒絶される事を恐れていた。

裏切られることを恐れていた。

だから、私は、誰にも近づかなかった。

近づけなかった。

常に一人で居た。

心に誰も近づけさせなかった。

だから、私は、完璧だった私は、孤独な存在になった。

誰にも愛されなかった。

誰にも受け入れられなかった。

そう、たった一人を除いて。

本当の私に気づき、愛してくれた人を除いて。

私が、精一杯愛した人。

心の底から愛して、そして守りたいと思った人。

私の唯一の恋人。

彼女だけは、そんな私を愛してくれた。

そんな私を受け入れてくれたその彼女によって、私は救い出された。

孤独の牢獄から抜け出せた。

今の私は、もう以前の私ではない。

完璧だった私はもういない。

簡単にもろく崩れ去ってしまう弱い存在。

もう彼女なしでは、語れない存在。

けれど、それでも、彼女は私を受け入れる。

そんな私を受け入れる。

それを私は幸せに思う。

彼女といれる事を幸せに思う。

彼女に愛されている事を幸せに思う。

そして、まどろみの中で生きていけるこの事を、私は幸せに思う。

他の誰でもない彼女と一緒に生きていける事を。

第一話 予測できない彼女の思惑

桜舞い散る季節、春。

私達は、二人して同じ大学に入った。

私―上月聡―と彼女―雪野沙希―の二人は。

そして、それと同時に驚いた。

その人間の多さにだ。

私達の通う事になった大学は、関西圏にある有名公立大学である。

その道の人なら、きっと知っている。

有名な財界人を何人も輩出している。

そんな大学だが、別にマンモス校ではない。

総合大学ですらない。

単なる単一大学である。

それなのに、その人間の多さに驚いた。

特に、対人恐怖症と言うか、人の多い所が苦手な私にとってはショクだった。

これから、四年間過ごす事になるこの大学。

はたして、自分はこの人の多さに耐えられるだろうか。

そう思ったら頭痛がしたのだ。

とはいえ、すぐにそんな事も言っていられなくなった。

初めてだらけの事。

余裕なんてすぐになくなる。

人の多さに構う暇などなかった。

その日を、無事に終わらせる事で手いっぱいだった。

確かに、高校に比べれば、宿題も少なく、そういう面では楽だった。

けれど、その分、全てに置いて自己責任が問われ、誰にも頼れない状況になっていた。

そんな状況下で、人の多さなど大して、問題にはなりえなかった。

大学生活に慣れるまでは。

「なあ、合コンいかないか？」

私は、思わず、目の前にいる男を凝視した。

この男の名前は、植野孝。

一応、この大学で初めて出来た私の友達だ。

「行かない」

けれど、その問いかけはすぐに切って捨てる。

いきなりの事に驚いたが、そんなものに行く気は皆無。

むしろ、金の無駄だ。

「はあ!？」

けれど、それは彼には通じなかったらしく、露骨に驚かれた。

はつきり言わせてもらえば、オーバーリアクションだ。

なんだか、彼女に似ているような気がしないでもない。

……いや、それは彼女に失礼か。

彼女は、こんな意味不明な突拍子も無い提案をしない。

少々無茶な提案はたまにあるけど。

「いや、まで、もう一度聞くぞ。合コンに行かないか？面子はかなりレベル高いぞ？」

それはさておき、孝は私の答えが気に入らなかったのか、

もう一度そう言う。

「行かない」

けれど、答えは変わらない。

「俺、彼女いるし」

彼女がいるのに、合コンに行く意味なんて無い。

あれは、出会いを求めるためのものはずだ。

なら、私には関係ない。

まあ、彼女がいるのに行くと言う人もいるらしいが、私はそんな気はないし。

「は！？お前、彼女いたの！？」

けれど、それこそ、一番のショックだったらしく、ありえないほど目を大きくしている。

いや、まあ、孝の気持ちも分からないでもない。

この私に彼女がいるなんて、そうそう予測は出来ないと思う。

「まあね。高校の時からの彼女がいるんだよ」

だから、別になんとも思わない。

ちよつとだけ、腹立たしいような気がするけど、気にしない事にする。

気にするだけ無駄だし。

「まじかよ」

そんな心優しい私は、孝の言葉を聞き流す。

目の前にいる孝といえば、思いつきりショックを受けて凹んでいる。

そこまで、ショックだったのだろう。

この私に彼女がいた事が。

「ま、まあ、そうだよな。選ばなければ、誰だって彼女ぐらい出来るよな」

しかし、どうにか立ち直ったのだろう。

顔を上げると、そういう。

失礼な言い草をつけてくれたが。

まあ、私の相手なら、そんなふうに思ってしまったても仕方がない。

何と言っても、わたしはそんなたいした男ではない。

顔が特別いいわけでもないし。

だから、その意見はもつともだ。

もつともだけど…

「あ、沙希さん？俺だけだよ、今どこにいるの？うん？食堂？ご飯食べて終わった？そっか。んじゃ、今からこっちに来てくれない？外のベンチに座ってるからさ、隅っこの方の」

私は、携帯を取り出すと、彼女にかける。

もちろん、こっちに呼び出すためだ。

孝の意見はもつともだ。

だけど、だからと言って、許せるかと言うことは別の話だ。

彼女の事とやかく言われるのだけはイヤだ。

まあ、孝が沙希さんを見て、どんな反応をするのかが、見てみたいと言つのもあるが。

「おい、もしかして、彼女呼んだのか？」

そんな僕の内心に気づいたのだろう。

顔を寄せてくるとそう言う。

けれど、どこかその顔はいやそうだ。

まあ、期待していないからなのだろう。

「まあ、そうだな」

私は、それを取り合わず、適当に流すと、食堂の方に視線を送る。

ちょうど、彼女の姿が見えたからだ。

もちろん、彼女も私の姿を確認すると、ぱたぱたと走ってこちらに向かう。

「どうしたの、聡君？」

そして、私の目の前まで来ると、そう言う。

「いや、ちょっと沙希さんの事を紹介しておこうかなと思って」

それに対して、私は平然と最初から準備していた言葉で返す。

けれど、平然としていられないのは、目の前にいる孝である。

目を大きく見開き、口をあんぐりとあけている。

もうほとんど呆然としている。

私は、その姿がたまらなくおかしかった。

もう、今にも笑い出しそうだった。

それこそ、腹がよじれてしまいそうなほど。

「紹介するね。俺の高校の時から彼女で雪野沙希さん。専攻は俺達と同じ経営」

けれど、私は、それを腹の中に押し込むと、平然とした顔で続ける。まさしく、とどめである。

孝は、うなだれるように、俯く。

瞬間的に見えた顔は、うつろだった。

まあ、こんなありえない現実を目の当たりにしたら、そんな顔をしかたくなるだろう。

何と言っても、彼女は文句なしの美少女なわけだし。

くりりとした二重の愛らしい大きな瞳。

さらさらと流れる極上のシルクのような黒髪。

神の仕事と言わんばかりに均整の取れたパーツの配置。

淡雪のように白く澄み、しみやそばかすなんてない綺麗な肌。

抱きしめれば折れてしまいそうなほど華奢な体。

けれど、出るところはしっかりと出ている。

そんな少女が私の彼女だと言うのだ、ショックを受けないほうがおかしい。

高校の時だって、それはそれは大混乱になったわけだし。

「てか、沙希さん、座ったら？」

それはいいとして、いまだショックから立ち直れてない、孝を放置し、彼女に席を勧める。

さすがに、いつまでもたたせておくわけにも行かない。

彼女は小さく頷くと、私の隣に腰をかける。

「それにしても、いいの？」

そして、それと同時にそう尋ねた。

いったい何の事だろう。

一瞬、考えたが、すぐに思い浮かぶ。

「別にいいよ。元々隠してたわけでもないし」

こういうことだった。

私達の関係は、まだ誰にも言っていない。

彼女もそうだ。

とは言え、彼女に答えたように、別に隠していたわけでもない。

ただ、わざわざ言う必要がないと思ったから言わなかっただけの事だ。

「そっか。んじゃ、堂々としてもいいんだよね？」

それを、どうやら、彼女は勘違いしたらしく、隠しているものだと思っていたらしい。

まあ、高校の時の例があるから仕方ないけど。

「まあね」

だけど、もう隠す必要もない。

私に与えられるものなら、全て彼女に与えたい。

それが、私の支えになってくれる彼女に唯一出来ることだから。

「そっかそっか」

そして、その言葉は、彼女にとっては何よりのプレゼントになったらしく、さらににじり寄ってくる。

彼女の息遣いも必然的により強く感じ始める。

最初に触れ合ったのは手だった。

彼女の手のひらをそっと私の手に重ねる。

そして、さらに近づくと、今度は手を絡める。

もう、そこからは、動かない。

しっかりと僕の腕を抱きこむと、体重を僕に預ける。

二人きりの時みたいだ。

いや、もう、今、ここは二人だけの世界となっている。

邪魔する物は、きつと誰も……

「うがああああ!!」

いないと思ったら、しっかりといた。

どうやら、復活したらしい。

思いつきり頭を抱えて、叫んでいる。

どうやら、彼にはこれは少々刺激が強すぎたみたいだ。

「いったい、どうなってんだよ!？」

それが爆発したのだろう、私に掴みかかってくるように口を開く。

とはいえ……

「だから、さつきも言ったじゃん。沙希さんは俺の高校の時から
彼女だって」

だからといって、素直に答えるつもりはない。

本当は、どういう意味で分かっているんだけど、あえてほじくり返す。

だって、そっちのほうがおもしろいから。

「ちげーよ、そうじゃなくて、どうして、お前みたいなの……いや、なんでもありません、俺が悪かったです」

そして、そんな私の答えに対して、業を煮やしたのだろう。

早速、食いかかってくる。

まあ、その勢いもあつという間に削がれたが。

もちろん、他の誰でもない彼女だ。

さっきまで、ほんわか幸せ顔をしていたけど、孝がその言葉を言いかけたところで、恐ろしいまでに睨んだのだ。

あれは、まさしくメデューサの眼力ぐらいの威力はあったと思う。

そして、その直撃を受けた孝は、あっさり負けを認めたのだ。

まあ、彼女と戦おうなんて思わないだろう。

負け戦と分かって戦う輩はいない。

まあ、それはそれで、おもしろくないから、悔しいけど。

もう少し粘ってくれたほうが、私としてはおもしろいし。

それはそれで、彼女に失礼な気がしなくてもないけど、元々そんな性格だから諦めてもらおう。

いまさら、どんな事をいったところで、変わらない。

俗に言う『三つ子の魂百まで』と言う奴だ。

まあ、今の性格は、三つの時に形成された物じゃないけど。

でも、それはそれでいいとおこづ。

気にするだけ、疲れるし。

「ねえ、そういえば、どうして、私呼んだの？」

そんな脳内ではかな事を考えていると、彼女が孝から視線をはずしながら、そう尋ねる。

どうして、そう聞くのかは分かっている。

もちろん、

『さっき言ったよ』

なんて無粋な事は言わない。

彼女は、どうして、自分を孝に紹介しようとしたのかを聞いていた

のだ。

私がわけもなくそういう事をするような人じゃないことが、分かっているから聞いたんだろう。

「まあ、なんとなくだよ、なんとなく」

だからと言って、素直に本当の事を言うわけにもいかない。
変に心配をかけたくない。

それに、誰だって聞きたくないだろう？

自分の恋人が合コンに呼ばれただなんて。

私だって、聞きたくない。

だから、言わなかった。

「いや、俺が合コンに誘ったの」

なのに、あっさり目の前にいるばかりは言ってくれた。

せつかく隠そうとしたのに、なんて奴だ。

しかも、子憎たらしい顔をしてこっちを見てるし。

どうやら、喧嘩の種をふっかけるつもりらしい。

「ふん。そうなんだ。行くの？」

が、そんな目論見はあっさり崩れ、何でもなさそうに、彼女は聞いてくる。

まあ、そんな物だろうとは分かった。

目の前にいるばかりは、ぼんやりとそんな彼女を見る。

「いや、行かないよ。俺には沙希さんがいるからね」

それが、おもしろくて、笑いそうになったけど、そんな奴より、彼女の方が大事。

変に出遅れて、誤解されても困るし。

私にとっての優先順位は彼女だ。

まず、彼女が第一。

彼女がいないと、まともに生きて行く自信がないから、そうなる。

本当に、自分で言うのもなんだけど、だめ人間だと思う。

まあ、彼女の事を大切にしようとしてる分は、まだですけど。

これで、彼女の事を大切に出来ないようじゃ最低だし。

て、私も、本当に自己弁護が好きだね。

「そうなの？別に、私の事なら気にしなくてもいいんだよ？」

そんな情けない自分にあきれ返っていると、私の答えを聞いた彼女は、あっけらかんとそう言ってくれた。

一人蚊帳の外にいるばかりは、今度こそ呆然としている。

まあ、私も呆然としてるけど。

「いや、行かないって。家でのんびりしてるほうがいいからさ」

だけど、そのままにいるわけにいかないから、さっさと答える。

というか、彼女に薦められるこの状況って、おかしいだろうに。

そして、それを呆然として断る彼氏もぜったいいない。

これが、浮気な彼氏なら、裏で喜ぶかもしれないけど、私はそういうタイプじゃない。

むしろ、困惑するばかりだ。

「ねえ、えっと、名前はなんて言うんですか？」

そんな私を尻目に彼女は、あくまでもいつもどおり。

おかげで、私が踊らされている。

こんな状況なんて、めったにない。

常に私が精神的優位に立っているというのに。

「え、俺？俺は、植野孝だけど。て、もしかして、俺の事は紹介してなかったのかよ」

それが歯がゆくて、どうにかして、状況打破を考えたが、それよりも早く、孝にかみつかれた。

まあ、その気持ちは分からないでもない。

だけど、二人の世界に入ろうとしていたんだから、そんな無粋な事を言えるわけもない。

人の恋時を邪魔する奴は馬に蹴られて、死んじまえて言うことだ。

とはいえ、どんどん旗色が悪くなって来た。

二対一のかかなりの劣勢状況。

どうする？

「ねえ、どうして、呼ぼうと思ったの？」

けれど、考えているうちに状況はさらに悪化し始める。

ここは、逃げるしかない。

彼女を連れて。

「いや、人数が足りなかったからさ」

「そつか。んじゃ、聡君も入れておいていいよ」

だけど、その策は無情にもあっさりと崩れてしまった。

と言つか、なんで、こんな事をするのだろうか？

人に浮気させようと言っことか？

もしかして、私に愛想つきたのだろうか？

だから、あえて、遠まわしに根回ししているのだろうか？

違う人とくつつけようと？

まあ、それは無茶だとは思っけど。

私のもてなさはかなりのものだし。

彼女に告白された以外一度として、告白どころか、バレンタインデーにチョコをもらった事のない男だ。

毎年、妹にもらった男なのだ。

そんな男がもてるわけない。

…なんか、むなしくなってきた。

ていうか、本当に、愛想が尽きたから、別れようとしているのだろうか？

別に彼女の事を信じていないわけじゃない。

彼女が私を見る目は、以前と変わらない。

だけど…

変わらないだけで、ずっと思い続けてもらえてると思えない。

「たまには、気晴らしに行って来た方がいいと思うよ?」

そんなしよげ返っている私を尻目に彼女は、呑気に笑いながら、そういったのだった。

第二話 彼女の真意（前書き）

godaccell様、感想ありがとうございました。
お返事させていただきました。

第二話 彼女の真意

その日一日の私は、本当に暗かった。

彼女の真意が読めず、悶々と一人で考え込んでいた。

それでも、結局答えは出ず、私は諦めて家に帰った。

片道三十分ほどの距離を自転車でのんびりと走る。

緑が多く、風も涼やかで気持ちいい。

実家に比べれば大都市と言ってもいいこの街だが、ところどころ田園が残ってて心が安らぐ。

やはり、私はどうも根っからの田舎人のようだ。

まあ、無理して都会人になりたいとは思わないが。

人間が多くて、時の流れの速いところはどうしても苦手なのだ。

軽やかに走り抜ける。

やがてアパート街に入る。

ここは大学の新設にあわせて作られた。

もちろん、私の通っている大学ではなく、その他の私立大のだ。

その大学は私の通う大学とは違い総合大学で、かなりのマンモス校。

そのため、たくさんの学生住人が確保できる。

だから、ここにはたくさんのアパートがある。

もちろん、私の借りているアパートもそこにある。

まあ、一応名目上はマンションとはなっているが。

大学の目の前を通り過ぎ、角を曲がる。

そこを過ぎれば、私のアパートはすぐそこ。

もう一度角を曲がるとたどり着く。

申し訳程度に作られている駐輪所に自転車をとめ、鍵を閉める。

そして、そのまま中に入る。

所詮は学生マンション、中は簡素なつくりをしている。

私は入り口傍にあるメールボックスを確認する。

あるのは広告紙だけ。

それをそばに置いてあるゴミ箱に捨てると、部屋に向かう。

私の部屋は一階の一番奥。

つまるところ１０１号室。ドアに手をかけ、中に入る。

鍵はかかっていない。

もちろん、かけ忘れたわけではない。

「ただいま」

「あ、おかえり」

中に人がいるから。

もちろん、それは沙希さん。

彼女の部屋は僕の部屋の隣。

実は、この部屋は、僕の母親に内緒で話し合って決めたものだ。

もちろん、だめだしをくらったら諦めるつもりだったが、あっさりと了承をもらった。

理由は、新しいのに相場より安く、設備も充実している。

これだった。

まあ、これならば、母親も断れなかった。

そして、それぞれ僕は１０１号室を。

彼女は１０２号室を借りたのだ。

その結果として、お互い部屋の行き来が多くなり、必然的に半同棲みたいな形となった。

今のやり取りだって、初めのころは、なんだかお互い恥ずかしかったものだ。

「まだ、したく終わってないから、テレビでも見てて」

それはさておき、靴を脱ぎ、中に入ると、彼女はそう続けた。

どうやら、まだ晩御飯の準備は終わっていないみたいだ。

半同棲が始まってからは、まずは役割分担を決めた。

とはいっても、当番制だ。

どちらも、家事をしつかりとする。

共同生活をする上で必須のことだ。

私が料理をする事だってある。

私は、かばんをかけるとソファに腰掛けて、テレビのスイッチを入れる。

とはいっても、この時間帯はまともな番組はない。

だから、必然的に彼女の方に気が向く。

彼女の手伝いをしたいからだ。

もちろん、以前はお願いした。

だけど、あっさり却下されたのだ。

彼女は、最初から最後まで自分で作った物を私に食べてもらいたい
といった。

そういわれては、なんとも言えない。

素直に言う事を聞くことしか出来ない。

まあ、私も彼女が手伝いを申し出られたときは、彼女と同じように
したけど。

お互い様だ。

私は、彼女の方を見て、内心でため息をつく、テレビへと目を戻
した。

そして、そんな退屈な時間が過ぎ、待ちに待った時間がやってきた。

彼女の用意した夕飯をやはりおいしかった。

日に日に腕が上がっていつているのが分かる。

そんな彼女を見ていると私もつかうかしていられなくなる。

私とて彼女に食べてもらうのだから、自信を持って出せる物にした

い。

まあ、今でも自信を持って出せるが、やはり日々精進していなくて
は。

夕食を終えた私たちはソファに座る。

最近では、私のひざの上に座るのがお気に入りらしく、いつもちょこ
んと座っている。

そして、それにあわせて私は彼女をすっぽりと腕で抱き込む。

小説でこんな事をしているのを読んだからだ。

まあ、我ながら、変なところからしかも偏った知識ばかり集めてい
ると思うけど。

でも、彼女はそうすると嬉しそうにしていた。

だから、私も幸せだった。

直接ではないけど肌と肌とのふれあいでお互いの心が暖かった。

「ねえ、どうして、あんな事言ったの？」

そんな中で、ずっと気になっていた事を聞いた。

いくら考えても答えは出ない。

ならば、直接彼女に聞いたほうがいいと思った。

所詮、彼女と私は他人。

なんだか、冷たい言い方かもしれないけれど、それは変わりようがない。

彼女の考えている事が完全に分かるわけではない。

分かるはずがないのだ。

だから、私は彼女に分からないことがあったら、聞くことにした。

間違いを起こさないためにも。

また、あのような勝手に勘違いをして彼女を傷つけたくはないから。

「どうして、合コンに行けって言っただの？」

私は聞きなおした。

彼女が小首をかしげていたからだ。

まあ、いきなりすぎて、ついていけなかったのだろう。

だけど、今度こそそれで通じたみたいで、彼女は頷くと

「縛りたくないから、かな？」

彼女は、笑ってそう言った。

「ほら、私って、すつごくやきもちやきでしょ？ちよつとでも、他の女の人と仲良く話してるだけで、すぐに不機嫌になるし。理不尽な事でも怒り出しちゃう。私もダメだとは思うんだけど、どうしてもそうやっちゃう。でも、いつまでもそんな事してたら、聡君の自由がなくなっちゃうでしょ？友達とかもいなくなっちゃうかもしれない。周りから良くないうわさを立てられるかもしれない。でも、私はそれもいいやなの。自分のせいでまた聡君を傷つけたり、追い込んだりしたくないの。だから、ちよつどいい機会かなって思ったの。自分を我慢させるための。まあ、聡君には悪い事をしたかなって思っただけ」

そして、続けてそういいきつた。

彼女は、『また』、と言った。

それは、私と同じで、自分のした過ちを後悔しているのだろう。

そして、それを繰り返さないために必死にがんばっている。

その答えが、合コンだったわけだ。

まあ、確かに、彼女の考えにはそれはぴつたりなのかもしれない。

自分自身を嫉妬と言うものから耐えさせるには、ちよつどいい。

自分の彼氏が、合コンに行っている。

それだけで、十分気が気でなくなり、妬心が顔を出してもおかしくない。

まあ、彼女が言った通り、私としてはすこし困った事ではあるが。

やはり、できることなら、行きたくないのだ。

でも、彼女のためと思って、一肌脱ぐしかないわけだ。

彼女は、私にたくさんの物を与えてくれている。

だから、私も彼女にたくさんの物を与えたい。

恋愛は契約みたいなものだと思う。

いや、恋愛だけではない。

人間関係と言うものは、契約みたいなものだ。

お互い何かを与え合っている。

何も与え合えなければ、関係は続けられない。

価値の等価交換。

だから、私は彼女から何かをもらっている以上、彼女が望む物を与えなくてはいけない。

それは、彼女のためではなく、自分のため。

彼女を失いたくない自分のため。

その想いはきつと彼女も同じだと思う。

私を失いたくない。

だからこそ、私に私が望む物を与えようとする。

そうでなければ、わざわざ自分が苦しむような事はしないはずだ。

誰だって、自分が傷つくのは嫌なのだ。

その傷を耐えて、それに見合っただけの何かを与えられなければ。

「そっか、分かった。んじゃ、一応行ってくるよ」

私は、彼女に答えた。

今の私はたぶん笑顔だと思う。

自分でも分かるほど、顔がにやけていると思う。

それぐらい幸せだから。

自分の想像が取り越し苦労ですんだから。

やはり、彼女の想いは私と同じ物であってくれたから。

なら、行くしかない。

「あ、その代わり、浮気はだめだからね？」

「もちろん、分かってるよ」

とはいえ、しっかりと釘を刺されてしまったけど。

まあ、最初から浮気なんて物をする気は皆無だけど。

彼女以上に愛せる人なんて、きっと私にはいないから。

第三話 再会と混乱する心

その週の日曜。

私は孝たちと街へ来ていた。

もちろん、理由は簡単。

合コンだ。

ついにその日がやってきたのだ。

私は内心でため息をついた。

最初のころこそ、彼女のためだと思っていたが、その日が近づくにつれて、気が重くなった。

私ははつきり言ってかなりの人見知りが激しい人間だ。

初対面の人とはまともに話せない。

いや、話を振ってくれさえすれば、うまく立ち回れる自信はある。

ただ、話を振ってくれなければ、全くと言っていいほど会話に入れる自信はない。

まあ、人見知りを失くすのにちょうどいい機会だと言えば、そんなのかもしれない。

それでも、いきなり、これは難易度が高いような気がする。

今更言ったところで、どうにもならないことだが。

時刻は、待ち合わせの10分前。

まあ、私は、待ち合わせの30分前には来ていたが。

どうしても、落ち着かなくて、さっさと出てしまったのだ。

だけど、それは失敗した。

頭痛がしてきたのだ。

やはり、街は人通りが多く、それに比例するように、私の周りにもたくさんの人が行き交っている。

おかげで、元来対人恐怖症みたいな症状のある私は、いつきに調子を崩しかけているのだ。

これでは、ただでさえ、危険信号がともっているというのに、余計に悪化してしまいかねない。

出来ることなら、さっさと来て欲しい。

それで、さっさと終わって欲しい。

心から、そう願う。

果たして、その願いが叶ったのか、相手の女性陣が来た。

確かに、孝が言ったようにレベルはかなり高い。
なんだか、私だけが浮いているような気がする。
一人だけレベルが追いついていない。

今まで、言わなかったが、孝は意外と顔がいい。

さわやかなスポーツ青年と言った感じだ。

そして、周りもかなりレベルが高い。

つまり、私一人だけ置いてけぼりと言うわけだ。

余計に気が重くなってきた。

内心でため息をつく。

やはり、さっさと帰ったほうがいいみたいだ。

「ねえ、もしかして、上月聡君じゃない？」

そんな事を考えていると、不意に女性陣の一人から声をかけられた。

それは、平均女性よりももう少し小さめな身長した女性だった。

「え？まあ、そうだけど？」

いったい誰なのだろう。

心の中でそう思いつつも、答える。

いきなり名前を呼ぶとは、少々ぶしつけだと思いましたが、それよりも、誰だか知りたかった。

「やっぱり！ほら、私。中学の時の同級生の陽野。覚えてない」

そして、それは叶った。

彼女はあっさりと答えてくれた。

だけど、それは、私としては逆だったのかもしれない。

本当なら思い出さなかったほうが良かったのかもしれない。

なぜなら、彼女は私の過去を思い出させる一人だから。

あの、絶望の底に落とされたあの時の事を思い出させる一人だから。

だけど、この瞬間に関しては助かった。

彼女と言う話し相手がいるおかげで、私は浮かずに済んだ。

相手方に一人でも知り合いがいるのは本当に助かる。

私と彼女はお互い向き合うような形で座っている。

孝が気を利かせてくれたのだ。

無茶で、適当で大雑把、しかも、人の迷惑を考えない行動をする男だけど、こういう気配りはしっかりと出来る。

まあ、そうでなければ、私だってつるんではいられなかっただろう。

いまだに私は、人付き合いに距離を置き、冷めた目で見ている。

だから、どうしても、好きになれない人間は切り捨ててしまう。

「にしても、変わったよね」

彼女は、私をまじまじと見ながら、そういう。

だけど、彼女の気持ちも分かる。

彼女の知っている私。

いや、俺、か。

あのころの上月聡と言う人間は、ベクトルが今とは真逆に向かっていた。

陽気でお調子者で人懐っこい男。

そして、人の事が好きだった男。

人の事が大好きで、信じていて、大切にしていた。

だけど、今の上月聡は違う。

たとえば、彼女が私の本性に気がついていなかったとしても、それでも分かるだろう。

あの頃の上月聡とは全く違う。

今の上月聡は、陽気でもなければお調子者でも人懐っこくもない。

どこまでも冷めた人間。

彼女なら、それを感じられたと思う。

彼女は私の近くにいた。

あの頃の私たちは友達だった。

とてもとても仲が良くて、他愛のない話をして、多くの時間を過ごしていた。

だから、きっと気付いたんだと思う。

あの頃とは全く違う私に。

「そうだね。まあ、いつまでも、子供じゃいられないよ」

私は、彼女にそつと笑いながら答える。

そう子供ではいられない。

いられなかった。

私は現実を知ったから。

だから、何も知らない子供ではいられなかった。

いつまでも、夢を追いかけていられなかったから。

でも、それは彼女に言う必要はない。

適当にお茶を濁す事で十分だ。

幸いこの程度の戯言は普通に誰でも言う。

冗談として。

だから、私も冗談めかせて、そう言った。

役者として舞台に立ってきた。

もちろん、学生の部活でしかない。

たいした物じゃないのかもしれない。

でも、私には絶対の自信がある。

それは、何度か職業として役者をしている人に演技を教わったから
と言うのもある。

だけど、それ以上に、演技をしつつ、あたかも現実が舞台かのよう

に振舞ってきた私だからこそ、決して見透かされない自信がある。

誰にも本当の自分を、自分の心を見せないように、ばれないように生きてきたから。

もちろん、いくらかの例外はあると思う。

沙希さんの母親はまず間違いなく、それに入る。

だけど、彼女は違う。

彼女にはきっと分からないと思う。

彼女には、それに気付くだけの年輪がないと思うから。

絶対的な経験がないから。

それは、別に彼女を下に見ているからではない。

これは単なる事実なのだ。

彼女には、分からない。

そして、私も彼女と同じく、人の事など分からない。

私もまた、経験が足りないから。

「にしても、どうして、俺だっけ気付いたの？」

そうやって、思考に頭を浸しながら、会話を続ける。

これは、もつとも気になっていた話題だ。

「ああ、それね。ほら、聡の高校に千鶴が行ってるでしょ？千鶴に、卒業写真見せてもらったの」

だけど、その謎はあっさりと解ける。

まあ、そんな事だろうとは思っていた。

彼女と千鶴は、かなり仲が良かった。

いや、私も合わせて、三人はかなり仲が良かった。

後もう一人別に里香もいた。

良く三人でくだらない会話をした。

男の友達がいなかったわけではない。

だけど、彼女たちと過ごす時間は割と多かった。

他の男友達と比べれば、かなり多かった。

まあ、それで一悶着があったりもしたが。

でも、今更の話しだ。

「でも、千鶴ちょっと怒ってたよ？いきなり冷たくなったって。」

そして、彼女はそう続けた。

その表情は、言葉どおりに少々非難がましい。

まあ、確かに非難される事はした。

私は、千鶴とも距離を置いた。

今までずっと仲の良かった千鶴。

たぶん、三人の中で一番仲が良かった。

話というか、ノリとかそう言った物が良くあったのだ。

だけど、私は、そんな千鶴を避けた。

理由はただ一つ。

一人になりたかったから。

もう、誰ともつるみたくなかったから。

たとえば、それが一番の友達だった千鶴だったとしても。

やはり、裏切りが怖かったから。

大切に、信頼していて、大好きだった千鶴だからこそ、裏切られるのが怖かった。

千鶴にまで裏切られたら、もうきつと立ち上がれないと思ったから。

「はは、まあ、なんというか、俺にもようやく高校にあがって、第二次性徴に入っただってという感じだよ」

だけど、これもまた、彼女にいう必要のない事。

言った所で、もうどうにもならない。

何も変わりはない。

所詮は過去なのだから。

「今度千鶴に冷たくして悪かったって謝つていてくれよ」

そして、私が千鶴に冷たく当たった事も過去の事。

だから、変えられない。

できるのは、せいぜい謝る事ぐらい。

「分かった。一応、言っておく」

彼女は私の言葉に頷いた。

正直少し安堵した。

自分でいいに行けと言われるかと思った。

昔の彼女ならそういいかねないと思ったから。

彼女もまた、変わったのかもしれない。

人は日々成長し、退化して行くものだから。

でも、きっと彼女の根っこのところは変わっていないと思う。

私が、知っていた頃の彼女とあまり変わらない。

なぜか分からないけど、私はそう思った。

合コンは無事に終わった。

それもこれも、彼女のおかげだ。

素直に感謝している。

ただ、もう一度会いたいとは思わない。

私は、夜風に身を寄せながらそう思った。

彼女の存在は私にとっては脅威だ。

今の私を破壊しかねない。

今の私の最優先事項は、沙希さん。

彼女の存在があつてこそ、今の私がある。

だけど、陽野……

伊緒の傍にいと、それが壊れてしまいそうで怖い。

沙希さんの事を遠ざけてしまいかもしれない。

それだけ、彼女と言う存在は私の中では、大きい。

自分のアパートに着くと、中に入る。

沙希さんは、私の帰りを待っていてくれた。

心配してくれていたのかもしれない。

はたまた、やきもきしていたのかもしれない。

それは、分からないけれど、彼女は私を出迎えてくれた。

でも、今は、一人でいたかった。

今の私は混乱しきっている。

全てを終えて、ようやく今の私は静かに思考に入る事が出来る。

そして、だからこそ混乱している。

過去と現在がごちゃ混ぜになっている。

今まで封じ込めていた記憶がよみがえってくる。

それが苦しかった。

だから、一人でいたい。

でも、私からはそんな事は言えない。

彼女は、きっと合コンの内容が気になるはずだから。

そんな彼女を追い出すことは出来ない。

それこそ、浮気をしたと言っているようなものだ。

でも、だからといって、今はまともに話せるような状況じゃない。

きつと、いろいろとぼろが出てくる。

彼女の前では、私は本当に弱さを露呈してしまう。

もちろん、そんな私を彼女は守りたいと思っている。

だけど、私としては、そんなことをさせたくない。

それに、何があっても、これはしって欲しくない。

過去の事を彼女にはいいたくはない。

「んじゃあ、私は向こうに戻るね？」

そんな心うちの葛藤に、彼女は気付いたのだろう。

彼女は、淡い笑みを浮かべると私の部屋から出る。

私の様子のおかしさに気付いたのだろう。

だから、気を使ってくれたんだと思う。

だけど、それがまた辛い。

自分の弱さと情けなさが齒がゆい。

私は、ベッドに倒れこむ。

一人が使うにはやや大きめのベッド。

当然だ。

このベッドでたまに彼女と一緒に眠る事があるのだから。

別に、身体を重ねるためだけじゃない。

私は、我ながら情けなくなってくるが、極度の寂しがりや。

時々、たまらなくなるほど人恋しいときがある。

そんな時に、彼女と一緒に寝てくれるのだ。

もちろん、私からは言わない。

彼女が、私の本当に少しだけの心の機微を感じ取って、そうしてく

れるのだ。

彼女はどんどん成長していく。

昔の彼女ならそんな事には気付かなかっただろう。

だけど、今の彼女は私の事を思いやる余裕さえある。

それじゃあ、私はどうなのだろうか？

成長したのだろうか？

あの日から。

何かが変わったのだろうか？

いや、全く変わっていない。

何も変わっていない。

変わらず弱いまま。

過去と対峙しただけで、私は怯えて立ちすくんでしまっている。

それが悔しい。

私は強さを求めた。

強靱な精神力を求めた。

そして、それを手に入れるためにそれなりにやってきたつもりだった。

なのに、それは結果が全く伴っていない。

私は愚かしいほど成長していない。

心は全くの弱いまま。

臆病のままでしかない。

これでは、今日感じた不安が現実になる可能性だって出てくる。

彼女に置いていかれる可能性だって十二分に出てくるのだ。

私は、一度深く深呼吸をする。

そして、想いつきり頬を叩いて、気合を入れなおす。

それは、決意を表す行動。

自分も成長するという決意の行動だった。

第四話 ありふれた日常こそ幸せの証

翌日目覚ましの音で目を覚ました。

時刻は7時。

支度とかを考えるとこの時間帯でないと間に合わない。

私は、洗面台に向かうと、寝癖を直すと、まずは冷蔵庫に入っていた麦茶を飲む。

起きたら、まず水分補給が大事だ。

寝ている間にかなりの量の水分を失うからだ。

水分補給を終えると、服を着替え、キッチンに立つ。

とはいっても、ワンルームのマンションだ。

申し訳程度についている程度だ。

私としては、少々狭く、使い勝手が悪いので気に入らないが、家賃の事を考えると妥当としか言いようがない。

まあ、求めすぎるのも考え物だ。

私は、冷蔵庫から材料を取り出すと早速料理を始める。

今日の朝食とお弁当は私の当番。

まあ、お弁当に関しては朝食を作るついでにできる。

料理は要するに要領なのだ。

手早く準備をしていく。

そして、完成していった物から順に皿に盛り、テーブルに並べる。

今日は、ふわふわオムレツにカリカリベーコン、オニオンスープ。

もちろん、オムレツは半熟だ。

やはりオムレツは中がとろとろじゃないとオムレツという感じはしない。

こんがり焼けたトーストもちろんつけている。

それにアイスコーヒーをつけて完成。

当然ながら、弁当の準備はばっちり。

私は、部屋を出ると、彼女の部屋へと入る。

もちろん、合鍵を使っただ。

中に入ると、彼女は依然としてすやすやと寝息を立てている。

その姿が本当に可愛らしい。

大学生になり、それこそ高校の時とは違って、嗜みとして化粧を始めた彼女。

そのため、化粧をしているときの彼女は、やや大人っぽく見える。

だけど、やはり、こうして寝顔を見ていると、まだまだ幼さが残る。

高校の時と全く変わらない。

出来ることなら、ずっとそんな彼女の寝顔を眺めていたい。

でも、そんな事して遅刻でもしたら目が当てられない。

それに、彼女だつて、私を起こすときは、しっかりと時間どおりに起こしてくれる。

「ほら、沙希さん、起きて?」

私は、彼女の肩を軽く揺する。

彼女は寝起きが比較的いい方。

「う、うん」

なので、それだけですぐに起きてくれる。

けれど、私はその逆。

私は実はすこぶる寝起きが悪い。

起きてても、なかなか布団からあがれない性質なのだ。

というか、低血圧なのだ。

今でこそ、彼女が起こしてくれたり、彼女を起こさないといけないから、早めに起きるけれど、高校の時は、ぎりぎりまで寝ていた。

時々、自分の寝汚さに嫌気がさしたときもあった。

「おはよう」

それはさておき、彼女はぼんやりとしながらも上半身を起こすのにこりと笑ってそういう。

どうやら、しっかりと起きてくれたみたいだ。

「うん、おはよう。んじゃ、さっさと身支度して、俺の部屋においで」

私は、軽く彼女の頭を撫でると、さっさと部屋を出る。

それから、数分して彼女は、私の部屋に戻ってきた。

しっかりと服を着替えて、寝癖もない。

ただ、化粧はまだしていない。

まあ、私が二人きりの時はできるだけしないで欲しいと言ったからだけだ。

私は、どうも化粧をされるのがあんまり好きじゃない。

自分を綺麗に見せたいと言っ気持ちは分かる。

私だって、それなりに見てもらいたい。

だけど、だからと言って、本当の姿を隠すのはどうかとも思う。

だから、私は彼女にお願いして見た。

いつも、彼女の素顔を見ていたいから。

と、話がそれたので、戻すが、二人しっかりと座ると

『いただきます』

声を合わせて、朝食にする。

少々冷えてはいるが、味の方は全然大丈夫。

これなら、自信を持って、良い出来だと言える。

彼女の方を見てみても、受けはよさそうだ。

相変わらず幸せそうに食べてくれている。

毎度のことだけど、この瞬間がやはり一番幸せだ。

彼女とキスをするのもいい。

抱き合うのだっていい。

一緒に寝るのだっていい。

だけど、私にとって一番の幸せはこの瞬間だ。

なんでもないどこにでもあるようなありふれた風景。

だけど、そのありふれた風景だからこそ、幸せを感じられる。

日常生活が満たされているんだって、感じられる。

第五話 穏やかな時間

朝食を食べ終えた私たちはそれぞれ部屋に戻って身支度をする
と、アパートを出た。

今日は彼女を後ろに乗せる。

昨日の罪滅ぼしみたいなものだ。

坂を上り下りしつつ、大学へと向かう。

朝のさわやかな風が肌に心地いい。

彼女は、私の腰をしっかりと抱きこんでいる。

それがたまらなく暖かくて気持ちいい。

こうやって、彼女を後ろに乗せた事は一度もなかった。

でも、こうしてやってみると、意外と楽しい。

また、機会があればやってみたい。

まあ、今日の帰りも同じようにして帰るわけだけど。

それはいいとして、大学手前の大きな坂に着く。

毎回思うけどこの傾斜と距離はきつい。

正直何度も心の中で愚痴っていたものだ。

でも、もうある程度なれた。

辛いことには変わりないけど、以前に比べると楽になった。

それに

「ホント、聡君ってば、なんでもこなしちゃうから、嫌になっちゃうよねえ」

こうして、彼女とちょっとした会話をするにもちょうどいい。

さすがにこいでる時には出来ない。

あまり二人乗りに慣れてないので、どうしてもこぐことに精一杯になってしまう。

「まあ、仕方ないよ。俺は小さな頃から少しずつやらされてたからね」

だから、この限られた時間の他愛ない話が、少しばかり愛しい。

「でも、やっぱり釈然としないよ。だって、普通じゃないよ？彼女より家事完璧な彼氏なんて」

だけど、彼女はさういうと、そっぽを向いてしまう。

拗ねてしまったようだ。

まあ、彼女の気持ちも分からないでもない。

女である自分が、男である私に負けたくはなかったのだろう。

特に、今年の頭から必死になって練習をしてきたわけだし。

それなのに、完璧に私の方がうまかったというわけだ。

もちろん、掃除とかそう言った物はさほど大差はない。

まあ、私の方が少しばかり手際はいいが。

ただ、料理に関しては私に軍配があがった。

幼い頃から、母親と一緒に台所にいるうちに覚えてしまったのだ。

後は、経験だ。

何にしても経験に勝る技術はない。

身体にしっかりと調理器具をなじませている分、手際も使い方もし
つくりとくる。

当然、手際が良ければ味だって変わってくる。

もちろん、手際が良ければいいわけじゃないけれど、手際が悪いと
味を落としてしまう可能性だってある。

だから、彼女が私に勝てなくても仕方がないと言えば仕方がない。

まあ、日に日に進歩して言っているから、あぐらをかいて呑気にしているわけにもいかないのだが。

私も進歩しなくてはならない。

一応、彼女にはれないようにいろいろとレシピチェックをしたりしてるのだ。

たまに、そんな細かな自分に悦に入ってしまったたり、はたまた逆にため息をついてしまう事もあったけど。

それでも、彼女のために手料理を振舞うのは正直楽しいし、美味しそうに食べてくれるとやはり嬉しい。

まあ、そういうところがやっぱり普通の男とは違うんだな、と思ったりもしたけど。

そのまま坂を上りきると大学はすぐそばだ。

数分で大学に着くと、講義室に向かった。

基本的に私と彼女が取っている講義は同じ。

まあ、英語だけは違うけれど。

英語の講義はだいたい高校のクラスの人数ぐらいに分けるため、一緒ににはならなかったのだ。

さすがに、上月と雪野では同じクラスにはなれない。

けれど、逆に言えば、それだけなのだ、違うのは。

だから、テストの時は勉強をする事も出来る。

まあ、基本的に持ち込みできるから、そんなに勉強する必要性はないんだけど。

それでも、同じ講義を取っているのは、強みだ。

とはいえ、講義室の中で一緒にいるような事はない。

彼女は彼女で、この大学での新しい友人がいる。

そして、私には私の新しい友人がいる。

帰れば一緒にいられるのだから、大学にいる間はお互い友人と過ごしている。

入り口で別れると、私は孝の隣に座る。

話した感じは、少々不真面目そうに見えるが、意外としっかりしていて、講義を休む事はおるか遅れる事すらない。

私はひそかに舌を巻いたものだ。

「おはよう、おやすみ」

孝にそうとだけ言つと、うつぶせになる。

朝早く起きたためにやっぱり眠い。

講義が始まるまでは、眠らせて欲しい。

幸い時間は少しだけある。

せめて、ここに来るまでに使った体力ぐらひは回復させて起きたい。

私はそのまま目を瞑ると、ゆっくりと眠りについた。

もちろん、そんな少しの時間だ。

しっかりと眠れたわけではない。

それでも、ある程度は休む事は出来たし、午前中の講義を乗り切る事も出来た。

高校の時優等生で通っていた私だけど、実際はそんなものではない。

むしろ、本当の私は、劣等生に近い。

まともに勉強などをしたがらないのだ。

正直、講義中もうつらうつらとしながら、ノートに取っていた。

集中していないのは、明らかだった。

それでも、壇上にいる教授は何も言わない。

ただただ、機会的に講義を続けていく。

まあ、だいたい大学の講義なんてものは、そんなものだ。

教授とてそれほど熱心ではない。

熱心にならなければならないのは、私たちの方なのだ。

こうして、大学に来ている以上。

まあ、大学に行く事がすでに形骸化している以上、それを求めるのも少々難があるにはあるが。

やはり、大学に行くのも当たり前前の事で、行かないほうが珍しい。

ほとんど当然の事のようになっている。

なので、学ぶのが好きで大学に来ているわけではなく、あくまでも当然の事をしているにすぎないのだ。

そんな中で、やる気が起きるわけもない。

形骸化したシステムの中でやる気を出す事ほど難しい事はそうはないのだ。

そして、それは私も同じ。

やる気などない。

元々好きで進学したわけじゃない。

親にそう言われたから、来ただけの事。

そこには、私の意志は全く介入していない。

まあ、ここを選んだのは、私の意思ではあるし、そのまま就職する気がなかったのも確かなので、こうして進学するしか他なかったのは確かだ。

けれど、親の言葉がなければ進学したかどうかともあやしい物だ。

それはいいとして、午前中の講義を終えた以上、そろそろ昼飯の間だ。

午後の講義に向けて体力をつけておく必要がある。

私は、孝を連れ立って、外のベンチに腰掛ける。

そして、そこで昼食。

もちろん、私は、弁当。

孝は朝来る時に買っておいたおにぎり類。

意外や意外、こいつは小食なのだ。

しかも、あまり酒も飲めない。

まあ、そんな奴が合コンなんかに行くなよとも思っけれど。

それとは、逆に私は大食家。

いくらでも、食べる。

もちろん、普段はちゃんとセーブはしている。

酒に関しても、かなりいける口だとは思う。

昨日もかなりの量を飲んだけど、後に引いている様子もない。

帰る時だって、周りが心配する中、普通にしっかりと帰れた。

のんびりと昼食を取り終えたら、そのままベンチに寝転がる。

そよそよとふく風が気持ち良い。

沙希さんと付き合う前。

外で食べているときは、良くこうやって日陰で寝転がっていた。

そこに、沙希さんが、来るようになってからは、やめたけど。

彼女と話す事に集中したかった事もある。

ただ、あそこで寝転がっていると、彼女が私に膝枕をしようとしたのだ。

あの時は、まだ今のようにな、恋人らしい事はできなかった。

恥ずかしさが圧倒的に強かったのだ。

だから、その時は、即座に断ったし、それから以降、そんな事を言わないように気をつけていた。

だから、彼女と付き合ってから、こうやって外で、のんびりと寝転がる事はほとんどなくなっていた。

だけど、ひさしびりにこうやってみるのも良いものだ。

今度軽くピクニックに行ってみるのもいいかもしれない。

二人で弁当の準備をして、緑地パークにでも。

幸い近くにそういう施設が合ったはずだ。

今度は、膝枕でもしてもらおう。

いや、逆に私がしてみるのもありかもしれないかな。

それはそれでおもしろそうだし。

まあ、彼女は恥ずかしがって絶対に嫌がるだろうけど。

「お前何にへらにへら笑ってたんだ？気持ち悪いぞ？」

そうやって、休日の予定を經てしていると不意に、上から失礼な言葉を投げかけられた。

もちろん、そんな事を言うのは孝だ。

「うるさい。堺さんにあつさりと振られた男に言われる必要はない」
確かに、少々頬が緩んでいたとは思う。

でも、それは普通だ。

好きな人とのデートを考える。

幸せな気持ちになって何が悪い。

むしろ、そんな気持ちになっている人間に対して水を刺すような事を言う人間の方が悪い。

そんな相手には、少々毒を吐いたってかまわない。

「お前、何で知ってるんだよ!!」

そんな私の反抗に驚いたのか、一瞬呆然としたが、すぐに気を取り直すと、くいついて来た。

まあ、誰にも言っていないいつもの事を知られたら、確かにそう思っても仕方がない。

「お前の行動はばれなんだよ。明らかに、堺さんの事を見るお前の目は、恋愛感情丸出しだし。だけど、しばらくしたら、いきなりテンション低くなっているし、堺さんの話題も出なければ、見ようもしない。更に言えば、元々俺は、堺さんとは英語で同じクラスで、たまに話す事ぐらいあるから、彼女が彼氏もちの事ぐらい知ってた。なら、どうなったかぐらい分かるだろう?」

でも、ばればれな行動をされてしまったては、こちとら気付きたくなくとも気付いてしまうのだ。

特に、孝のように分かりやすい奴ならば。

現に、目の前にいる孝は、目に見えて分かるほど落ち込んでいる。

これで、分からないほうがおかしいというものだ。

それとも、こいつは、私がそれに気付かないほど鈍感だとも言うつもりだろうか？

もしそうだというならば、失礼な話した。

人間観察は、役を演じる上で一番重要な事なのだ。

私が手を抜くはずがないのだ。

とはいえ、少々無理があるといえは無理もある。

だいたい、友人相手にまで気をはれと言うのは酷と言うものだ。

だから、ばればれな態度を取ってしまったても仕方ないだろう。

まあ、だからと言って、慰めてやる気はさらさらないが。

そんな事よりも、彼女とのデート計画の方が大事だ。

私は、呆然としている孝を尻目に、デートの計画をし始めた。

第六話 デートのお誘い

「ねえ、今度の日曜空いてる？」

家に帰り、晩御飯を食べて、のんびりと寄り添う形でテレビを見ながら、私は彼女に切り出した。

今、彼女は私のひざの上にちょこんと座っている。

昨日帰った後、ちょっと態度が冷たかった分、今日しっかりと甘えたかったんだろう。

まあ、私自身こうやって、甘えられる事は嫌いじゃない。

むしろ、好きだ。

まるで、小説のワンシーンのようで。

それから、一応、昨日あったことは、それなりに話した。

もちろん、伊緒の事も言っておいた。

だけど、ただの同級生と言う事にしておいた。

変に仲が良かった事まで言って、いらぬ心配はさせたくない。

それに、私自身うまく説明する自信もなかった。

なんだか、彼女への秘密が多くなっていくようで嫌だけど、仕方が

ない。

こうして、付き合っていく以上、絶対に言ってはならない秘密だつてあるんだ。

恋愛は小説や漫画のようにはいかない。

心を裸にして付き合っていけるほど簡単じゃない。

だから、お互いにごまかすところも必要になっていく。

お互いを傷つけないためにも。

「うん？空いてるけど？」

それはいいとして、彼女は、顔をあげて、私の顔を見ながら、そう答える。

その姿はなんだかとても可愛い。

なまじ整った顔立ちをしている分、お人形さんのようだ。

ちなみに、私の部屋には実は割かしぬいぐるみが置いてある。

可愛いものが好きな私は、ユーフォーキャッチャーでとった物を置いているのだ。

まあ、単なる暇つぶしでやっていたにすぎないけれど。

「そっか。んじゃ、デートしない？確かその日晴れるから、二人で

お弁当作って近くの緑地パークに遊びに行こ」

そして、私はついに切り出した。

まあ、もちろん、結果は分かっている。

「え？デート？うん、もちろん行くよ」

当然の事ながらイエスだ。

結果もそれと同じイエス。

しかも、彼女は私がデートに誘った事がかなり嬉しかったのか、にこにこしている。

「久しぶりのデートかあ。でも、聡君から誘ってくれるのって珍しいよね」

しばらくの間はそうやって、私のひざの上で笑みをこぼしながら、私の腕とかで遊んでいたが、落ち着いてくると、私の顔をまじまじ見ながらそう言った。

「デートするときって、だいたい私が誘うもんねえ」

そして、そう付け加える。

けれど、私にしてみればその言葉は耳がいたくなる。

確かに彼女の言う通りなのだ。

私から彼女をデートに誘う事はほとんどない。

それこそ、よっぽどの理由がない限り。

だから、こんなふうに、唐突にしかも理由もなくデートに誘ったのを不思議に思っただのだろう。

まあ、彼女がそう思っても仕方がない。

仕方ないけど、もう少しがんばらないといけないな、私は。

今度から、もう少し彼女をデートに誘うようにしないとイケないな。

「あはは。そうだね、ごめんね?」

だけど、まずは謝っておこう。

こういうところが男の甲斐性にもつながるし。

いや、そんな事はないか。

「ううん、別にいいよ。でも、今度からはちゃんと誘ってよ?」

そんな分けの分からない事を答えているうちに、彼女は答えてくれた。

許してはくれたみたいだ。

そのかわり、しっかりと釘を刺されてしまったが。

まあ、自業自得と言えば自業自得だが。

今まで、ちゃんと誘わなかった私が悪かったわけだし。

「うん、了解」

私は、彼女の言葉に苦笑しながら頷く。

彼女は、私の膝の上で、くすくすと笑うと

「よろしい」

そういった。

第七話 らぶらぶカップル公園デート

彼女との約束の日。

私たちはそれぞれの部屋でお弁当を作っている。

私が彼女のために。

彼女が私のために。

それぞれがそれぞれのためにお弁当を作るのだ。

もちろん、発案は彼女。

私も、なんら困る事はないので、即座にオーケーを出した。

昨日のうちに下ごしらえをしておいた物を、いつきに調理して行く。

せっかくのデートだから凝った物にしたい。

そう思ったら、やはり前日から準備しないとどうにも間に合いそうにもなかったのだ。

特に煮物系統は昨日のうちにあらかたしておかないと、味が染みない。

凝ると決めた以上手抜きは許されないのだ。

出来上がった料理を一つずつ皿に分けて、その後弁当箱に入れる。

もちろん色彩のバランスを考えてミニトマトを入れてみたりする。

気がつけば、お弁当の中がおかずで一杯になっていた。

どうやら料理に夢中になりすぎて量の事を考えていなかったみたいだ。

そんな自分に苦笑しながら、別の弁当箱を棚から出す。

おかずをつめた物よりかは少々小さい。

まあ、それぐらいがちょうどいいか。

炊飯器に入っているご飯に軽く塩を振り、混ぜる。

おにぎりを作るのだ。

炊飯器からご飯を取ると手のひらにのせる。

もちろん、しっかりとラップをしいている。

ご飯の上に、紅鮭の切り身をのせると、ラップで包み軽く握り、形を整える。

弁当の大きさと形を考えて、俵型にする。

出来上がったそれに、海苔を巻いて完成。

それを弁当箱に詰めると、また次のおにぎりに移る。

せめて、あとこんぶとかつおも握っておきたい。

私は、ご飯を手のひらのラップの上に置くと、また握り始めた。

準備を終えると私たちは、早速自転車に乗って出かけた。

もちろん、彼女は私の後ろに座っている。

なんだか、私たちの間ではまっってしまったのだ。

彼女もまたこうやって腰にしがみつくのが暖かくて気持ち良いみたいだ。

それがなんだか心がつながっているみたいで嬉しかった。

風を切りさき進む。

それがとても気持ちいい。

たまにこうやって身体を動かすのも良いものだ。

今度機会があったら、彼女と連れ立って軽くスポーツを試みるのもいいかもしれない。

彼女は運動神経のかなりいい。

それに変わって、私はたいした事のない。

なら、ちょうどいい相手になるだろう。

むしろ、彼女に手を抜いてもらわないといけないかもしれないけど。それはいいとして、ようやく緑地パークに着いた。

休みのせいか子供づれが多い。

その逆にカップルは少ない。

まあ、ここはデートスポットではないから、しかたない。

それに、むしろ私はこういうところの方が好きだし。

対人恐怖症みたいなものがあるんだけど、子供だけは例外だ。

私は意外と子供が好きなのだ。

従妹が良い例だ。

一度、従妹が家に遊びに来た時に、ちょうど彼女もいたのだけど、そのときの私の様子を見て笑われたのだ。

あまりにももの変わりようにびっくりもしたと言っていた。

まあ、彼女の言うとおり、確かに豹変していたけれど。

それぐらい、可愛いんだからしかたがない。

だから、すべからく可愛い物好きな私が子供好きなのも当然なのだ。

なんとなく、論理がむちゃくちゃなような気がしなくてもないけど。

「うん、やっぱり緑に囲まれるって気持ちいいよねえ」

私たちは、木陰にシートをしくと、寝転がった。

そよそよとふく風と、木漏れ日がすごく気持ち良い。

「そうだね。やっぱり、来て正解だったでしょ？」

そう答えながら、私は木の葉の隙間から見える空を眺める。

雲は小さな綿雲が見える程度で、綺麗に晴れ渡っている。

絶好のピクニック日和だ。

周りでは、はしゃいでいる子供たちの声がする。

そこはまるで都会の喧騒など無縁で、どこにでもあるような暖かな世界。

なんとなく、幸せだった。

こっちに来てから、ここまで心が静まるのは初めてだ。

彼女と一緒にいるときも確かに、心が静まる。

彼女といっただけで幸せを感じる。

でも、やっぱりそれだけでは、足りなかった。

どこまでも、都会の喧騒が離れなかった。

もちろん、本当に都会なわけじゃないだろう。

東京や大阪の方に行けば、もっともつと人がいて、喧騒も大きいだろう。

だけど、私にとって、ここは、やはり都会なのだ。

たくさんの人がいて、たくさん車が通り、たくさん店であふれかえる。

そこで見られる自然はちらほら程度。

どこにも心休まる空間なんてなかった。

だけど、この公園は違う。

子供たちの楽しそうな声。

そして、たくさん緑。

都会の喧騒とは完全に切り離された空間。

心休めるには最適な場所だ。

私は、閉じていた目をあけると、彼女を見る。

彼女は、すやすやと気持ちよさそうに寝息をたてていた。

彼女も、私と同じように、朝早く起きて準備していた。

まだまだ寝たりなかったのだろう。

私は、彼女の頭をあげると、膝の上に置く。

彼女が私にやりたがっていた事。

どうして、そこまでしたがつたのかが、知りたかった。

だから、私は彼女の頭を膝に置き、そつと彼女の額を優しく撫でた。

気がつくと、私もいつの間にかに寝てしまっていたようだ。

携帯を取り出すと、時間を見てみると、だいたい30分ほど経っていた。

ただ、変な格好で寝てしまっていたせいか、身体の節々が痛い。

膝枕しながらのお昼寝はどうやら、お勧めできないらしい。

それはさておき、彼女の方を見ると、まだ眠っている。

本当に気持ちよさそうだ。

思わず悪戯心がわいてくるが、押しとどめる。

一瞬、キスでもしてみようかと思ったけれど、不意打ちみたいでなんだか嫌だ。

それに、彼女とて、眠っている間にされるのは嫌だろう。

むしろ、起きているときにしてと絶対に言うだろう。

最近の彼女は、ことあるごとにキスをねだる。

特に、卒業式の後の打ち上げで、アルコールを取ったんだけど、彼女は酔うと積極的になるらしく、キスをねだり始めたのだ。

小声でいつていたのが、唯一の救いだけど、するするとしなだれて来るから、周りにしてみれば、あまりにもあからさま過ぎる。

おかげで、酔ったクラスメイトははやし立てるし、拳句の果てにはキスをしろと騒ぎ出したのだ。

しかも、彼女はこれ幸いと思ったのか、一緒になって騒ぎ出すし。

おかげで、皆が見ている前でやらされる羽目になった。

あの時は本当に死ぬほど恥ずかしかった。

それと同時に、彼女にアルコールは絶対に飲ませちゃいけないとも思った。

こっちの身が危険になる。

それこそ、彼女に押し倒されたなんて事になったら、笑えない。

それに彼女も、次の日、落ち込んでいたし。

しきりに私に謝っていたものだ。

というわけで、彼女にはアルコールは取らせない事にした。

もちろん、私も彼女の前では取らない。

まあ、まだ未成年なんだから当然なんだけど。

けれど、もはや、大学に入れば形骸化しているとしかいいようがない。

ゼミの教授が薦める事だってあるのだ。

どうのこうの言ったところでどうにもならない。

たしなむ程度には飲まないといけないわけだし。

それはいいとして、今更ながらに思ったけれど、かなり話がずれてきている。

私はため息をつくと、彼女をもう一度見る。

相変わらず気持ちよさそうに眠っている。

なんだか、子猫みたいだ。

彼女の額、頬を軽く撫でる。

すると、彼女は小さく身じろぐ。

なんとなく、その姿が従妹とだぶる。

彼女を前にして考える事じゃないのかもしれないけれど、なんとなくそう思ってしまった。

やはり、こうして見ていると彼女は幼く見える。

今日は、化粧なんかしていないから特にだ。

たぶん、普通に高校生に見えてもおかしくない。

まあ、つい最近まで高校生だったんだから当然と言えば当然だが。

私も同じく外見だけを見れば、確実に高校生に見えるだろう。

まあ、髪の色は高校生らしくはなく、染めているけれど。

彼女に染められたのだ。

私は髪が多く、少々重たい感じがする。

だから、彼女が軽く見せるために染めたのだ。

いや、もちろん、最終的に染めたのは私で、彼女は提案しただけだ。

まあ、最初は私もいやだったけれど、確かに鏡で見れば、私の頭は本当に重く見えたので、素直に彼女の言う事を聞いたのだ。

まあ、今はそれで良かったとは思っているけれど。

今はこの色の方がしっくりとくるし。

ちなみに、彼女は染めてはいない。

まあ、彼女は今の髪色がぴったりだし、変に染めて髪質を傷めるのも良くない。

なので、それは私も賛成だった。

まあ、だからといって、私の髪質はどうでもいいかというと、そういうわけでもないけれど。

でも、まあ、どうせ大学にいる間だけなのだから、別に良いだろう。

元々、さほど気にしているわけでもないし。

「……」

さて。

いい加減暇になってきた。

彼女の寝顔を見ているのはいい。

正直、心の中がほんわかあったかになる。

それはいい。

だけど、言い方が悪いかもしれないけれど、いい加減飽きた。

いや、別に彼女に飽きたわけではない。

ただ、こうして膝枕をして、彼女を見つめ続けるのに飽きたのだ。

こういう状態で延々と、起きるまで見つめ続けるといつつわものがあるらしいが、私にはどうやら無理そうだ。

結局、彼女を膝の上に寝かせながら、もう一度眠りについた。

起きた時に体中の節々が痛むだろうけど、まあ、それも良いだろう。

目を覚ましたときに彼女がどんな反応をするかを見る事の方が楽しみだからだ。

それから、数分後、膝の上で身じろぐのを感じて、私は目を覚ました。

膝の上を見てみれば、彼女がもぞもぞと動いている。

どうやら、もうそろそろお目覚めのようだ。

私は軽く伸びをして、固まりかけている身体をほぐす。

その間に起きてしまった彼女は、私の顔をまじまじと見る。

それにあわせるようにして、私も彼女の事を見て

「おはよう」

にっこりと笑ってそう言った。

一応、どんなふうに言おうか考えていたのだが、やはりこれになった。

まあ、たぶん、これが一番ダメージが大きいはず。

「え、ええええええ！？」

その予想はしつかり的中した。

彼女は、びっくりして起き上がると、頬を両手で押さえて、声を上げる。

ここまでリアクションしてくれると、私としては嬉しい。

本当におもしろい。

だから、こんな絶好の機会を見逃すわけには行かない。

少しばかりからかってみるのもおもしろいだろう。

「本当に気持ちよさそうに眠ってたね。どうだった？」

私は、そういうと小首をかしげる。

「もう、笑わないでよ！」

けれど、表情に出てしまっていたようで、拗ねた彼女は、私の事を軽くはたと、そっぽを向いてしまう。

なんだか、そういうところを見るとほっとする。

彼女もまだまだ子供なんだなあ、と。

私と一緒にのだと。

「ごめんごめん。ほら、拗ねないで？」

私は、彼女を後ろから抱きしめると、彼女の頭を撫でる。

ほとんどバカップルと同じだ。

もちろん、昔の私ならしないし、したくてもできなかっただろう。

やはり、彼女への遠慮があったから。

だけど、今は違う。

別に彼女の意思を無視しているわけじゃない。

彼女が嫌がるのならば、私はしない。

ただ、心の中にあつた壁を少しずつ壊していつているのだ。

心ができるだけ裸と裸で付き合えるようにしている。

「もうそろそろお腹もすいてきたしお弁当にしようよ、ね？」

彼女もきつとそれを分かっているはず。

言葉にしないと伝わらない事もある。

そういうけれど、言葉で伝えてはいけないものもだってある。

事恋愛に関してはそういうえる物があると思う。

言葉にせず心同士で感じるからこそ、温かくなれることだってあるんだ。

私は、弁当の準備をする。

それを見た彼女は、ため息をつきつつ、その作業を手伝ってくれる。

別に最初から本気じゃなかった。

遊びの範囲。

お互い心を見せ合えるから、そんなふうに見える。

ここも変わった事。

以前の関係ではなかった事。

以前の私ならきつと、心の中は不安で一杯だっただろう。

でも、今の私は彼女の事を信じられるから、不安はない。

これは、妄信ではなく、信頼。

彼女と言う人を知る事が出来たからこそ、抱けるもの。

「んじゃ、食べようか？」

私は彼女のお弁当を、彼女は私のお弁当をそれぞれ手に持つと

「うん、いただきます」

「いただきます」

二人声をそろえてそういうと、弁当箱のふたをあける。

私のお弁当。

彼女が私のために作ってくれたお弁当の中身は色とりどりだった。

栄養のバランスも良さそう。

それになにより

「沙希さんらしいね」

彼女らしい。

本当に可愛らしく並べられている。

女の子のお弁当。

そんな感じのするものだ。

私は、その中から玉子焼きをつまむと、口の中に入れる。

その瞬間に出しの甘さが口に広がる。

優しい甘みが玉子の味を引き立てている。

「うん、おいしい」

私は、条件反射のようにそうつぶやいた。

相変わらず彼女は基本がしっかりとできているから、安心して食べられる。

日に日に腕をあげていつているから、上達の度合いも見られて、その楽しさもある。

彼女の料理は本当に、私にいろんなものを与えてくれる。

「そう？ありがとうございます」

私の呟きが聞こえたのだろう。

彼女は、そういうと嬉しそうに表情を崩す。

「聡君のお弁当もすごくおいしいよ？なんだか、勉強になるよ」

そして、続けてそう言った。

まあ、勉強になるのどうのこうのはいいとして、彼女の口に合ったみたいで良かった。

一応、私の料理は彼女の舌に合わせている。

そのため、少しばかり実家の味とは違う。

微妙な塩加減とかそういった本当にちょっとした違いも考慮している。

たぶん、実家ではそんな事はしないと思う。

かなりめんどくさいことだし、疲れるからだ。

だけど、彼女のためだと思うと、それも別の話になってしまったのだ。

何が何でも彼女の舌に合うものを作りたかった。

そして、彼女の笑顔が見たかった。

お弁当を食べると、またお昼寝。

せっかく、公園に来たのだから動いても良いと思うけれど、木漏れ日が気持ちよすぎて、二人そろってそんな気分にはなれなかった。

まあ、食べてすぐ寝ると太ってしまうけれど、しっかりと運動しているから、大丈夫だろう。

「どう、かな？」

彼女は、私の顔を覗きこむとそう尋ねる。

ただいま、私は彼女の膝の上。

今度は、彼女が私に膝枕をしてくれている。

「うん、とっても気持ち良いよ」

女の子特有のやわらかさが、気持ち良い。

なんとなく、こういう言い方すると少々いやらしく感じるけれど、素直に答えておく。

どうせ、彼女の事だ。

そんなふうに感じる事はないだろう。

彼女もまた私と同じく恋愛初心者。

あらゆる面で経験が少ないし、知識もない。

本当に、純情と言うか、純粹さを失っていない。

そこが、彼女の良いところでもあるのだけれど。

「そっか、それは良かった」

案の定、彼女は、嬉しそうに声を上げると、にこにこしている。

全く、気にしているような様子はない。

本当に可愛らしくて、微笑ましい人だ。

私は、目を閉じる。

せつかくの機会だ。

こんな幸せな状況はそうそうない。

ならば、この機会を逃すのはもったいない。

せつかくだから、膝枕をしてもらいながら、お昼寝してみるのもありだろう。

まあ、彼女は、最初からそのつもりで、私に膝枕をしてくれているのだろっけねど。

「んじゃ、俺、ちょっと寝させてもらっかね？」

そして、私はゆっくりと眠りについた。

第八話 追憶と予兆

そんなに遠くはない昔。

けれど、まだ人生の四分の一しか生きていない私にとっては、遠い昔。

私が私ではなく、私が俺だった頃。

強さを求める事なく、弱い自分を知りながらも、何も変えようとしなかった頃。

変化を恐れ、安定を求めていた頃。

その頃の私を、今私は見ている。

これは、夢。

私の意思はどこにもなく、実感すらない。

ただただ、過ぎ去った時が脳裏を横切る。

そのときの私は幸せだったのだろうか？

それとも、不幸せだったのだろうか？

私には分からない。

幸せなんて曖昧なもの。

誰にも決める事は出来ない。

決める事なんて許されていない。

だけど……

それでも、私は知りたい。

あの時の私は本当に不幸せだったのか。

本当に救いなんてなかったのかを。

あの時の私は、自分を不幸だと思っていた。

幸せなんて結局幻想なんだと思っていた。

だけど、今は違う。

今の私は、幸せのただ中にいる。

彼女が私に幸せを分けてくれている。

私が絶望したりしないように。

私が壊れてしまわないように。

けれど、いつまでも、それであるわけにはいかない。

私は幸せを知った。

そして、それと同時に絶望も知っている。

だから、分かる。

終焉へと向かう軌跡。

それが、本当に小さなほころびからくると言う事を。

本当に些細な事で壊れてしまつと言う事を。

だから、私はそのほころびを許さない。

何があっても、ほころんだりしないようにしたい。

だから、問う。

本当に、あの頃の私は不幸だったのか。

その事を。

唇に何かを感じて、私は眠りから覚めた。

目をあけると、すぐ傍に彼女の顔があった。

そして、彼女は、私と目が合うと、そっぽを向いてしまった。

だけど、その頬はやや赤い。

すぐに分かった。

どうやら、先ほどの感触は、キスなのだろう。

軽い悪戯心でやろうと思ったところまでは良かったけれど、私が目を覚まして驚いたのだろう。

まあ、確かにそんな状況になってしまえば、ばつが悪くて目をあわす事は出来ないだろう。

そこらへんが、彼女らしいと言えば彼女らしいけど。

「おはよう。膝枕ありがとうね？気持ちよかったよ」

私は、彼女にそうお礼を言うと、起き上がる。

結構寝たつもりだが、意外と外はまだまだ明るい。

まあ、以外と膝枕は身体に負担がかかる。

あまり長時間させるわけにもいかないからちょうど良いと言えばそうだろう。

私は立ち上がると、そのまま身体を伸ばす。

やはり、少々無茶な体勢で寝てしまったせいで、身体の節々が少々痛い。

まあ、彼女の方が、きつかったとは思うけれど。

無駄にでかい頭を膝の上にのせていたわけだし。

大した物はつまっていないくせに。

使えない知識しか入っていないというのに。

大事なときには本当に役立たないというのに。

……今、私は何を考えた？

今、私は自分になんと言った？

いや、いちいち疑問符をつける必要はない。

分かっている。

今、明らかに私は自分自身に自嘲していた。

嘲笑をかぶせていた。

それは、なぜ？

どうして、そんな事をする必要がある？

私には、そんな事をする必要はないはずだ。

彼女に愛してもらっている私は十分存在価値はあるはずだ。

なのに、なぜ、私はそんな事を思った？

どうして、そんな発想へと向かったのだ？

「っ！」

途端に頭痛がした。

まるで、何かが私に考える事を押さえ込むような感じだ。

頭の中で声が、考えるな、と叫び続ける。

分けが分からない。

なぜ、私は、考えてはいけない？

なぜ、私は、疑問を持つてはいけない？

もしかして、寝ている間に、何かあったのだろうか？

もしかして、寝ている間に、夢で何かを見たのだろうか？

じゃあ、もしそうならば、私は夢の中で何を見た？

どんな夢を見たと言っただ？

分からない。

全く分からない。

覚えていない。

何を見たのか。

いや、それどころか、夢を見ていたのかさえも分からない。

完全な空白。

どんなに探り出しても、何も出てこない。

……怖い。

なんなんだ、この感覚は？

全く分からない。

何がどうなっただけでこうなっているのかが分からない。

分からないから、怖い。

ならば、どうすればいい？

簡単だ、理解すれば良い。

そうすれば、怖がらなくてもすむ。

そうだろうか？

今まで、そうして来たはずだ。

無知なのは怖いから。

何も知らないのは怖いから。

だから、いくらでもいいわけを作って生きてきた。

適当にいいわけにもならない事柄を見つけ出して、それを答えとして、自分に言い聞かせてきたじゃないか。

そうだろう？

上月聡と言う人間は。

俺と言う人間は……

「……俺？」

一人称が変わった。

そして、その瞬間に気がついた。

目が覚めて感じた違和感。

まるで、自分が自分でないような感覚。

いや、現在の自分ではないような感覚。

だけど、ようやくその違和感の正体に気がついた。

現在の上月聡なら、決して俺とは言わない。

その一人称は、封じたからだ。

それが、心が着る鎧の一つだったから。

決して上月聡の心に触れさせないための鎧だったから。

私と呼ぶ事で、あたかも自分自身を他人として見るために。

だけど、それが今壊れた。

私ではなく、俺に変わった。

いや、俺に戻った。

それが意味する事。

それは、きっと……

「ねえ、大丈夫？」

彼女が、俺にそう尋ねる。

その表情は心が痛むほど心配そうな顔をしている。

「全然大丈夫。だから、そんな顔しないで？ほら、せっかくの可愛い顔が台無しだよ」

そんな顔を俺は見たくない。

私が俺に戻ってもそれは変わらない。

彼女への想いは何一つ変わらない。

変わったのは、ただ一つ。

俺は、完全に心の鎧を脱ぎ捨てた。

その一点だけだ。

第九話 懐かしき友

心の鎧を剥ぎ取った俺は、とても快調だった。

おもしろいように、日々が過ぎていく。

今まで見てきた世界とは全く違う世界へと羽ばたく。

交友関係は一気に広がった。

もちろん、人見知りするのは今も同じだ。

それは、俺の昔からの性格だ。

直るわけではない。

だけど、今の俺にはそんな事は関係なかった。

心の鎧のない俺。

誰に対しても、裸の心で向かい合える。

そして、だからこそ、俺は臆病ではなくなった。

自分自身をさらけ出せる。

それが出来るのだから、もう何も恐れる必要はない。

何一つとして恐れる物なんてない。

今の俺。

それは、たくさんの友人に囲まれている。

今までの俺ならば、確実に考えられなかった事。

決してしようと考えなかった事。

それは、きっと彼女に出会えたおかげ。

沙希さん。

彼女が俺の傍にいてくれた。

だからきつと、俺は心の鎧を脱ぎ捨てる事が出来た。

「乾杯」

ジョッキを片手に、そう声を上げる。

今俺は、飲みに来ていた。

相手は、伊緒と千鶴。

なんと、千鶴もこっちに来ていたらしい。

まあ、大学まではさすがに同じではなかったが。

なので、せっかくだから久しぶりに集まってみようと思った。

ちなみに、里香は残念ながらない。

里香だけは、向こうに残ったらしい。

久しぶりに会ってみたいと思っていただけ、残念だ。

だけど、まあ、久しぶりに千鶴たちと会えた事だけでも十分だろう。

「にしても、いまだに続いてるんでしょ？よくもつわねえ」

全員がちょうど良い具合に酒が回ったところで唐突に千鶴が切り出した。

「それは、俺も思うよ。ホント、彼女も俺のどこが気に入ったのやら」

もちろん、何の事を言っているのかぐらいは予想がつく。

千鶴とはここ数年まともに話してない。

だけど、そんな事関係なしに、お互いダイレクトに心が通じる。

たぶん、こういうのがきつと親友とかいうのだろう。

「伊緒、聞いてよ。こいつたら、めちゃくちゃ可愛い彼女いるんだよ？うちの学校の俗に言うお姫様って奴？」

今度は、彼女は伊緒に絡む。

どうやら、千鶴は酔つと絡むたちらしい。

まあ、なんとなく千鶴らしいけど。

そういえば、千鶴は変なところで良くぼけていた。

普段はしっかりとしたお姉さんタイプで、いつも俺の事を弟扱いしてたけど、時々突拍子もないぼけをしていた。

まあ、たぶん、こつちが素なんだろう。

なんだか、それを見てほつとする。

お互い通じ合う心。

それだけじゃない。

以前と変わらずいられることがとても嬉しい。

一度手放したもの。

怖くて逃げ出して、失ったもの。

だけど、今、こうして、俺はもう一度取り戻す事が出来た。

本当に、俺はなんて幸せな人間なんだろう。

どこまでも、幸せすぎるんだろう。

可愛い彼女と心が通じ合う親友。

この二人がいる。

本当に、俺はなんて幸せなんだろう。

「あ、そういえば、そうなんだよね。聡って、絶対彼女とかできそうなタイプじゃないと思ってたんだけどねえ」

「うわ、何それ。普通にひどいし。」

「ああ、それは私も思ったわ。こんな男とも女ともつかないみょうちくりんに彼女ができるとは到底思えなかったし。」

「ちょい、千鶴！！そういう言い方はないだろ！！」

「あはは、冗談冗談。怒らないでよ。」

こうやって、悪ふざけばつかりの会話。

中学の時と全く変わらない時間。

それが心の中に染みわたる。

過去の事なんてどうでも良くなる。

今、この時間が幸せならそれでいい。

それを思い出させてくれる。

それから数時間延々と飲み続けていたが、千鶴がつぶれたので、お開きになった。

今、彼女は俺の背中ですやすやと眠りこけている。

隣に伊緒の姿はない。

途中までは一緒だったが、ついさっき部屋の前まで送って別れた。

そして、次は千鶴の番だ。

まあ、部屋は割と近くなので、助かる。

いくら、女の子とはいえ、やはり長時間になるとつかれる。

彼女の部屋に着くと、伊緒に出してもらった鍵を使って、中に入る。

なんとなく、許可なしに入るのは、嫌だけど、このさい仕方ない。

彼女の部屋はとても綺麗に片付いていた。

そういえば、かなり綺麗好きだったような気がする。

だけど、それ以上に気になるのは、部屋に埋め尽くされるファンシーグッズ。

ぬいぐるみが大量に置いてある。

どうやら、相変わらずのようだ。

なんとなくしつかりとしたお姉さんの感じのする千鶴。

だけど、変なところでボケる。

そして、それと同じように、可愛いもの好き。

そういうところは俺とそっくりだった。

まあ、だから、俺たちが仲良くなれたんだけど。

共通のネタがあったから。

いつまでも背負っておくのもしんどいから、俺は、彼女をベッドに寝かせる。

だけど、それと同時に気がついた。

彼女のベッドの脇に置いてあるぬいぐるみ。

ところどころくすんでいて、毛もぼさぼさになっている。

ここに置いてあるものの中で一番古そうに見えるぬいぐるみ。

それは、とても懐かしい代物だった。

確か、それは俺が、千鶴の誕生日にあげたもの。

いろいろと文句を言われ、せがまれ、渋々買ったもの。

当時中学生だった俺は、大して金を持っていたわけじゃないから、本当に安いもの。

手のひら大の小さな猫のぬいぐるみ。

それが、枕元に置いてあった。

俺は、思わず笑みがこぼれた。

きつと、大切に扱ってくれていたんだろう。

だから、こうして、どこも破れる事なく残っている。

本当に、ありがたい。

こうして、大事にしてくれている事が素直に嬉しい。

俺は、グラスを出すと、それに水を注ぐと、

「ほら、千鶴、起きろよ。水だ」

軽く頬を叩く。

まあ、大事にしてくれたお礼として、世話を焼いてやるのもいいだろう。

感謝の気持ちとして。

第十話 再び開く真実の扉

部屋に帰ると彼女がいた。

しかも、なんだか機嫌が余りよろしくなさそうに見える。

「ただいま」

俺は、彼女にそういうと、水を飲む。

どうやら、かなり飲んだせいで、のどが渴く。

もしかすると、明日は二日酔いかもしれない。

まあ、たぶん、大丈夫だろう。

これぐらいなら、前も飲んだ事あるし。

どこでと言われれば答えは一つ。

彼女の実家。

沙希さんのお母さんにしこたま飲まされたときだ。

そのときも、なんとか大丈夫だったから、今日も大丈夫だろう。

「どうかしたの？そんな顔してさ」

それよりも、気になるのは彼女。

どうして、そんな暗い顔をしているのだろうか。

俺は、彼女の事を後ろから抱きしめる。

まあ、何にせよ、彼女はこうすれば、機嫌は直る。

彼女はスキンシップが大好きだ。

だから、大丈夫だろう。

そう思っていた。

だけど……

「ごめん、私部屋に戻るね。おやすみ」

だけど、彼女は、俺の腕を振り解くと、部屋を出て行ってしまっ

わけが分からない。

どうして、そんな態度を取るのか。

もしかして、嫉妬でもしているのだろうか？

千鶴たちと飲みに行った事で。

だけど、別に浮気とかそういうのじゃない。

俺が好きなのは、沙希さんだし、それ以外に考えられない。

そんな事ぐらい、沙希さんだって分かっているはずだ。

なのに、どうして？

……まあ、明日になれば、どうにかなるだろう。

時間をかければ、きっと機嫌を直してくれる。

彼女だって、そんなに子供なんかじゃない。

だけど、現実はその簡単なはいかなかった。

彼女の機嫌は良くならない。

それどころか、最近はどこかよそよそしい。

抱きしめようとすると落ち着かないようなそぶりを見せるし、キスしようとするとなんだかんだ言い訳つけて拒絶する。

もしかして、これは本格的にやばいのだろうか？

別れてしまつのだろうか？

いや、そんなはずはない。

彼女は、今でも俺を起こしてくれるし、俺のために料理を作ってくれる。

だから、別れるような事になんてなるはずが……

「っ痛！」

途端に頭が痛む。

そういえば、最近ずっと頭痛に悩まされている。

どうしてだろう？

別に風邪を引いているわけでも、身体に異常があるわけでもない。

この前健康診断を受けたばかりだから、大丈夫なはずだ。

いったいどうなっているんだ？

いや、そんな事は別にいいか。

どうせ、考えたって、どうにもなりもしない。

うまく行くときは何でもうまく行くし、うまく行かないときは何をしてもうまく行かない。

なら、諦めて、待っていればいい。

なるようになるものはなる。

今までそうだったのだから、そうだろう。

俺は、目を瞑ると眠りに着く。

相変わらず頭痛を抱えながら。

何もない空間。

初めて来たはずの場所なのになぜか懐かしい。

いや、ここを俺は覚えている。

『おひさしぶりです』

不意に、声がした。

それと同時に、一瞬にして世界が変わる。

砂と海の世界。

それは、とても懐かしい世界。

俺が昔、良くいつていた場所。

俺だけの秘密基地。

そこだ。

『こうして、貴方と向き合つのは初めてですね。よろしく願います』

そんな事をぼんやりと考えていると、声の主がさらに続けた。

どこかで、聞いた事があるような声。

とても静かで、穏やかで、その声を聞く者全てに癒しを与える。

そんな感じの声。

俺は、その声の主を見た。

『っ！？』

だけど、それと同時に声にならない悲鳴をあげた。

そこに、いるのは、なんと俺だった。

まるで目の前にあるかのように、そっくりな俺がいる。

『ああ、やっぱり驚きましたか。まあ、それも仕方ないですよね』

その目の前にいる自分は、そういうと、おかしそづくすくすと笑う。

その姿に既視感を覚える。

その姿は、以前の俺が良くしていた姿。

俺が、俺ではなく、私だった頃の姿。

これは、いったいどういう事なのだろう？

そもそも、これはいったいなんなんだ？

『貴方は今とても幸せそうですね。沙希さんと伊緒、そして千鶴をそばに置いて』

けれど、もう一人の俺は、俺の事を無視して続ける。

どこまでもマイペースに語る。

俺は、怖くなった。

今の俺は寝ているはずだ。

ならば、これは夢。

ならば、起きればいいだけの事。

人は夢を夢と自覚するとその瞬間に目が覚める。

そのはずだ。

その証拠に覚醒し始めている。

この世界での意識はどんどん薄れていつている。

もう一人の俺の言葉は聞こえなくなる。

だけど、それを無視するかのようにもう一人の俺は言葉を続ける。

なぜか、その言葉だけは頭に鮮明に入ってくる。

分らない。

何がどうなっているのか分からない。

俺は、耳をふさぐ。

無意味だと言う事ぐらい分かっている。

だけど、そうでもしないと狂ってしまいそうだった。

そう、あの時のように。

え？

あの時のように……？

俺は思わず、呆然とした。

その瞬間に頭の中にもう一人の俺の声が響いた。

『私は幸せにはなっではいけない。だから、私は消えて、貴方を出した。偽者の貴方を。全てを壊し、絶望へと誘う存在の貴方を』

そう、あたかも悲しみだらけの祝詞のように。

第十一話 償いのための終焉

目を覚ますと、自分の頬をまず触った。

水気を感じたから。

案の定、そこを触るとべったりとしていた。

涙だった。

きつと、俺は……

いや、私は泣いていたのだろう。

一人称がまた『私』に戻る。

それは、心に再度鎧を着る事。

いや、そもそも、鎧は脱いでいなかった。

私が一人称を『俺』にした事。

それは、ただ、『俺』だった頃と同じ事をしたかっただけ。

私は、今全てを思い出した。

だからと言って忘れていたわけではない。

ただ、気付かない振りをしていただけ。

誰かのせいにして、決して自分を傷つけられないようにしていただ
け。

愚かだった私。

罪を犯した私。

それを全て思い出したのだ。

だから、私は『俺』と偽った。

私が『俺』であれば、かならず過ちを犯す事は分かっていたから。

そして、必ず全てを失う事が分かっていたから。

私は、幸せにはなってはいけない。

なる事を許されていないのだ。

私は、罪人だから。

起き上がると、キッチンに向かう。

すでに、そこには、彼女がいた。

相変わらず暗い表情をしいている。

原因は分かっている。

私の変化に困惑しているのだろう。

いきなりの変化。

しかも、どこにでもいるような、くだらない男に成り下がった。

くだらない事を言って、くだらない事をする。

どこまでも自分勝手に、周りの事を考えない最低の人間。

そんな私の姿を見て、困惑して、そして、悩んでいる。

「おはよう」

私は、彼女にそういった。

彼女は、驚いたように私の顔を見る。

だけど、すぐに、その驚きは消え、私の顔の事まじまじと見る。

その目はどこか懐かしむかのように見える。

それは、きっと間違いではない。

彼女にとっての本当の『上月聡』と言う人間がいるから。

彼女の知らない昔の『上月聡』ではなく。

彼女にとっての昔の私は異種的存在。

そして、だからこそ、私はそうした。

私は幸せにはなってはならない事を思い出したから。

私は罪を背負っているのだから。

今更ながらに思い出したのが本当におかしいが。

「別れようぜ」

私は、そう切りだした。

今の私は、昔の『上月聡』ではない。

だけど、それらしく振舞う。

以前の自分なのだから、大して難しい事ではない。

それに、今一番気にしなくてはいけない事。

それは、彼女の答えだ。

けれど、そんな事はある程度予測がつく。

彼女は、鈍い。

だけど……

「うん。分かった」

彼女は、私の言葉を聞くと、頷いた。

私は知っている。

彼女が人一倍私の事に敏感な事ぐらい。

だからこの瞬間をきっと予測していたと思う。

私が『俺』に変わったときに。

だから、あんなに暗かったのだ。

来たるべく終焉を思つて。

「だけど、一つ教えて欲しいの。どうして、別れないといけないの？」

彼女は、作業を止めると、私へと向き直るとそう尋ねる。

今にも泣きだしそうな顔をしているのに、気丈にも一生懸命にこらえて、私を見据えている。

その想いが胸に痛む。

でも……

「伊緒に会つて思い出したんだ。俺がこんな性格になつてしまった
本当の理由を」

でも、彼女には悪いけど、終わりにするしかない。

私は自分勝手だから。

私は我侭だから。

だから、彼女を傷つけても、私は私のすべき事をしなくてはいい。

「沙希さんは、少しぐらいなら俺の昔の事を知ってるよね？俺がどんな立場にいたのかは」

私は、彼女に尋ねる。

けれど、それは確認。

彼女は、当然ながらこくりと頷く。

彼女が私の過去を調べていた事ぐらい私とて知っている。

あれだけ、大々的にやっていたのだ。

気付かないわけがない。

「俺は、それが原因で今の性格になった。そう思っていた。いや、そう思い込ませていた。幸せになりたかったから。この手に暖かい想いを掴みたかったから」

初めて沙希さんと出会った時。

彼女と友人として過ごしてきた時間。

その時間のうちに、私は忘れていた。

そして、幸せになりたいと願っていた。

彼女と一緒にいる時間は楽しかった。

だから、気がつけば、私は幸せを願っていた。

自分が戒めていた物を自ら解こうとしていた。

たくさんの友人に囲まれた世界に戻ろうとしていた。

だから、私はあの時、彼女の告白を受けたのだろう。

彼女という間は楽しかったから。

不安だらけだけど、それでも幸せもあると思っていたから。

そして、幸せになっていくうちに、どんどん忘れていった。

自分のこの身の汚れを。

自分の過ちを。

「だけど、本当は違うんだ。俺がこの性格になった理由はただ一つ。罪の意識からだっただけ」

だけど、過去の事実は変わらない。

今、こうして私が思い出したように。

「俺は、確かに孤独だった。一人だった。だけど、伊緒や千鶴がいた。あいつらとつるんでいると楽しかった。だから、一人ではなかった。高校に入ってからと同じ。こっちに来てからは、友人はあんまりいないし、元々の人見知りする性格で、一人でいる時間が多かった。だけど、それでも、千鶴はそばにいた。だから、一人ではなかった。千鶴だけだったけど、それでも、俺は幸せだったし、こんな性格になる必要はなかった」

今思えば、高校に入っただけの時の私の性格は今のような感じではなかった。

そう、今のようになったのは、

「だけど、そんな中で俺は、一つ過ちを犯した。大切だったはずの人を傷つけた。たった一人の友人を傷つけた。大好きだった千鶴。俺は、彼女の心をずたずたに傷つけた。」

高1の秋。

私は、彼女の心をずたずたに傷つけた。

そして、それからだった。

私が今のようになったのは。

強さを求めるようになったのは。

「その償いのために、俺は、今の姿になった。人を拒絶した。傷つ

ける事が怖いから。俺は……人が大好きだから」

そして、それと同時に逃げ出した。

戦う事から。

強さを求めながらも、戦う事を恐れ逃げた。

悲しみと絶望と戦う事を諦めてしまった。

「そして、そんな俺だからこそ、幸せになるわけにはいかない。幸せになる権利は誰にだってある。義務を果たすのならば。幸せを求めて、絶望の渦中でも戦い続けるのならば。だけど、それをしない俺は幸せになる権利はない。例えば、傷つける事を恐れて、逃げ出したくせに、その想いと矛盾して、誰かを傷つけたとしてもそれは変わらない。これはある種贖罪だから」

私は、何も求めてはいけない。

それが私が決めた事だから。

千鶴を傷つけた私が唯一できる自分への断罪。

「だから、別れよう。俺はもうこれ以上沙希さんとはいられない。いるわけにはいかない。俺と一緒にいなくちゃいけないのは、沙希さんじゃなくて、千鶴。私は罪人。以前はそれから逃げてしまった。罪の意識に怯えて、千鶴から逃げ出した。だけど、もう俺はそうするわけにはいかない。罪を犯したならば、償わなければならない。その罪を償わない限り、幸せになっではいけない。他の誰でもない俺が俺を許せないから」

私は沙希さんのことが好き。

だけど、それ以上に優先しないといけない事がある。

私は、人の事を蔑視していた。

それは、私が受けた仕打ちのせいだった。

裏切りだらけの世界だった。

昨日までの友人が敵になる事だってあった。

だから、私は人の事を見下していた。

なんてくだらないのだ、と。

だけど、千鶴を傷つけた事で、私は気付いた。

私も何も変わらないのだと。

私もただの人間で、蔑視されるべく存在なのだ、と。

でも、私はそれでいるのは嫌だった。

だから、あの時は逃げ出した。

いや、逃げているつもりはなかった。

自分勝手な思い込みで自分に罪を下していた。

そして、私は他の人間とは違うのだ。

そう思い込んでいた。

けれど、今は、分かる。

そのときの行動は他の人間と全く変わらない事に。

そして、だからこそ、今、変えなくてはいけない事に。

私は幸せになっではいけない。

だけど、罪を償ったら、それは変わるだろう。

あくまでも幸せになっではいけないのは今の私。

未来の私ではない。

「分かった。聡君は罪を償いたいんだね。それなら仕方ないよね」

彼女はそういうと、私に笑顔を見せてくれる。

本当は泣きたいくせに。

目だって真っ赤にしてる。

「でも、私は待ってるよ。私は聡君が好きだから。それは別れたって変わらない。罪を償い終わるまで、私は待つよ」

だけど、それでも、彼女が泣かないのは、きっと未来に希望があるから。

絶望だけじゃないから。

過去の私を感じたものじゃないから。

好きなものを好きだと言えなかったあの頃。

大切な物を大切だと言えなかったあの頃。

あの頃の私は絶望だけしか知らなかった。

目の前にある幸せには気付かず、嘆いていた。

だけど、彼女は違う。

絶望と希望をしっかりと見据えている。

その中でしっかりと現実を見る。

だから、きっとこうしていられるのだろう。

私もそういられれば良かったと思う。

だけど、今更嘆いたところで変わらない。

だからこそ、これからを変えればいいだけの事なのだ。

そして、そのための選択なのだ。

これは。

第十二話 大切な人

「いいの？」

千鶴はグラスを空にすると、そう言った。

今は、彼女の部屋の傍のイタ飯屋。

そして、私たちは二人きり。

しかも、ここ最近はずっと、彼女とつきっきり。

だから、当然の問い。

彼女の事はいいのか。

そういう事なのだろう。

「うん。どうせ、今は独り身だし」

だけど、彼女が心配するような事は何一つとしてない。

そのために、私は別れたのだから。

彼女は、私の言葉を聞いて驚いた表情をする。

まあ、彼女とて、私と沙希さんの関係の深さを知っている。

別に、彼女に惚気話をしたわけじゃない。

ただ、本当の私を知っているだけに、私が恋人として受け入れた事の意味合いを分かっているのだ。

私がどれだけ深く愛していたのか。

それを知っていたのだ。

「私のせいかな？」

そして、すぐに眉間にしわを寄せると、そう尋ねる。

けれど、それは尋ねるといふよりかは、詰問に近い。

鋭い彼女の事だ。

彼女と別れて千鶴と一緒にいる時間を延ばす。

それがどういうことを意味するのかぐらいは予想がつく。

「違うよ。むしろ、これは俺が選んだ事。このままでは、きっと俺は自分の事を一生許せない。だから、千鶴に許しを請いたくてここにいる。千鶴だって知っているだろう？俺がどれだけ身勝手なのかぐらいは」

だけど、それは違う。

確かにきっかけは、千鶴と再会した事。

だけど、選んだのは私。

これ以上、罪を背負いたくないから、ここにいます。

「お前、それで、私がそんな理由で一緒にいるな、なんていわれたらどうするつもりなんだ？」

そして、もちろん、今こうして千鶴が言った事も考えた。

こんな形で一緒にいて欲しくないと思うのは普通だ。

だけど、

「俺の知ってる千鶴はそんな事言うなんて思ってたよ。お前は本当に優しいからな。お前は俺の事を恨んでいても受け入れてくれる。だいたい、俺の事を受け入れる気がないなら、俺が裏切った時点で、お前は切り捨てる事が出来たはずだろう？俺がそうしたように。」

千鶴がそんな事するとは思わなかった。

千鶴は優しい。

口調は厳しいし、毒ばかり吐いて、皮肉家でもある。

だけど、それ以上に、彼女は優しい。

本当に欲しい言葉をくれる。

あの時私が彼女を裏切ったとき、彼女は私にこういった。

『お前がそれを選ぶのは当然の事だ。私はお前の選択に何も言わないよ』

絶望して、彼女の手を突き放した。

だけど、彼女は、そんな私に笑ってそう言った。

ずたずたに傷ついて死にそうなほど苦しいくせに。

だから、私は思ったのだ。

千鶴のように強くありたいと。

千鶴のように優しくありたいと。

まあ、それは途中で失敗したが。

「だから、そういう事で、俺は全く心配はしていなかったさ」

私は、彼女にそう答えると、グラスに残るカクテルを飲み干す。

すでに、かなりの量を飲んでいる。

彼女と会うときはそうしないとやっていられないから。

そうじゃないと、また逃げ出したくなるから。

これ以上、傷つきたくない、弱い心が叫ぶから。

「お前は、本当にばかだな」

彼女は、泣き笑いするような顔を見ると、そうつぶやく。

「ああ、ばかさ。そんなの千鶴だって最初から知ってるだろう？」

そのつぶやきに答える。彼女のつぶやきは真実。

私はばかだ。

何一つ大切な物を守れない弱い人間だった。

好きだと言う想いすら、守りきれなかった。

だから、私はばかなんだ。

「でも、ホント、お前は優しいよ。優しすぎる。私と一緒にいるという事は、おまえ自身も傷つく事になるんだぞ。それでもいいのか？」

そんな私の事を、彼女は本当に心配そうにそういう。

自分の方がもっと辛いくせに、そうやって他人の心配をする。

だから、助けてやりたい。

せめて、傍で支えてやりたい。

「かまわないさ。俺は、千鶴事が大切だ。それは昔から変わらない。だから、きつとここでまた見捨てれば、裏切れば、きつと後悔する。死ぬまでずっと。どうして、あの時裏切ってしまったのか、と。そ

れだったら、一瞬だけの悲しみの方がいいさ。永遠の苦しみよりも」

そして、自分自身の罪から開放してやりたい。

もうこれ以上、罪を背負い続けるわけには行かない。

この罪は、私だけではなく、他人をも傷つける。

沙希さんを傷つけたように、それ以外の親しい人たちをも傷つける事になる。

だから、いつまでも背負い続けるわけには行かない。

私は、人の事が大好きだ。

だから、否定するのだ。

失望は期待を二乗する。

良く言った物だ。

私は人の事が好きだから、裏切られる事で、さらに憎むのだ。

期待しすぎて、それが絶望に変わるのだ。

だからこそ、私は背負い続けるわけには行かない。

きっと、期待して、裏切られて、絶望するだろう。

それは、この現実世界で生きている以上変わらない。

だけど、それでも、時々期待通りの事だってあるだろう。

そんなときに、この罪はいらない。

邪魔にしかない。

「ありがとう」

いつの間にか、千鶴は泣いていた。

化粧が涙でぼろぼろになるが、それでも私はその姿が綺麗だと思った。

いや、綺麗なのは姿じゃない。

ぐちゃぐちゃになっている顔なんて見れたものじゃない。

ただ、彼女の魂はとても綺麗だ。

私があこがれたあのときと全く変わらない。

素直に尊敬できたあの時と何一つとして変わらない。

「いや、俺こそ、言わせてくれ。こうして、俺の事を受け入れてくれてありがとう、って」

ひとしきり泣いた後、彼女はグラスに残った物をいつきに飲み干した。

気付けにはちょうどいいだろう。

そして、飲み干した後の彼女はいつもどおりだった。

いつもと変わらないしっかり物のお姉さんと言った感じた。

「んじゃ、そろそろ帰ろうか？」

俺は、そんな彼女の姿を確認すると、立ち上がり、伝票を持つ。

なんだか、居心地が悪い。

周りからかなり注目を浴びている。

これでは、おちおちと飲んではいられない。

彼女が立ち上がるのを確認すると、清算をして、彼女を送る。

もう話す事は全部話した。

ならば、今日はもうこれ以上一緒にいる必要はない。

というか、一緒にいないほうがいいと思う。

お互いの状況を確認した。

一日それを考える時間を置きさえすれば、翌日はまた元通りになる。

やはり、話した当日からは無理だろう。

お互い変な感じになりそうだ。

闇夜をぼつりぼつりといっている街灯を頼りに歩く。

かなりの量を飲んだ彼女は、足元あやしく、ふらふらとしている。

私はそんな彼女の手を取り、つなぐ。

そうしないと、車道に突っ込んで行きそうで怖かった。

彼女の手はほっそりと細く、冷たかった。

私の手とは全く違う。

沙希さんの手とも違う。

千鶴だけの手。

そして、その手こそ千鶴の手に相応しいと思った。

理由なんてない。

だけど、なんとなく、千鶴にはそれがぴったりだと思った。

彼女の手をぎゅっと握り締め、空を眺める。

滲んだ空に、星がかすかに光る。

実家にいる頃はいつも見ていた。

一人の夜はそうすることぐらいしか出来なかった。

自然はいつも私に優しくかった。

私の事をそつと優しく包み込んでくれていた。

だから、私は素直に彼らに心を開けた。

千鶴もきつとそんな人。

自然のように優しく包み込んでくれる。

私は、上を向いていた視線を落とす。

ちょうどそこには千鶴がいる。

どこにでもいるような、普通の女の子。

沙希さんとは違う。

沙希さんは本当に可愛らしい姿をした女の子。

だけど、沙希さんと千鶴のどちらがいい女か。

そついう問いになったら、私は間違いなく、千鶴だと言っただろう。

本当に千鶴はいい女だと思う。

それは彼女が彼女たらしめている根底の部分がそつ思わせる。

彼女はいい女だと。

それこそ、一所懸命になって探しても見つからないぐらいほどの、と。

私は歩みを止める。

彼女の部屋に着いたからだ。

私は、彼女の手を離す。

もう、大丈夫だろう。

私は、彼女へと向き直る。

「おやすみ」

そして、そういうと、その場を離れる。

だけど、そんな私と同時に彼女は、私の肩を掴むと……

そっと、私にキスをした。

唇と唇がかすかに触れる程度の子供染みたキス。

だけど、彼女にとってはきつと一所懸命な気持ち。

「おどろかないんだな」

彼女は、そっと笑うと、問いかける。

だけど、そんな事は愚問。

「千鶴の気持ちはずっと前から知っていたさ。それこそ、中学の時からさ」

私は、ずっと前から知っていた。

千鶴が私の事をどう思っていたのか。

だけど、私はそれに対してなんの反応も見せなかった。

それは、彼女にとって、残酷だったと思う。

けれど、それでも、どんな反応も取る事は許されなかった。

私は、伊緒の事が好きだったから。

そして、伊緒は私の友達が好きだったから。

どの恋愛ベクトルも向き合う事はなかった。

だから、どうしてもバランスを取るためには、誰もが気付いても気付かないふりをするしか出来なかった。

関係を壊すには、誰もが近すぎた。

親密すぎたのだ。

「そうか。まあ、勘の鋭いお前の事だ。当然と言えば、当然か」

彼女は、少し悲しそうな笑みを浮かべる。

だけど、それは私も同じ。

あの、どうしようもなかった関係の事を思い出すと、どうしてもそんな表情しか出来ない。

あの歯がゆかった日々を思うと。

「なら、私が何を望んでいるかも、分かるか？」

そして、彼女は、さらに悲しそうに笑みを浮かべるとさういう。

本当にどこまでも悲しそうな笑み。

そんな事を考えている自分自身を嘲笑っているような笑み。

「分かる、さ。他の誰でもない千鶴の思いだ。分からないはずがない」

そして、その想いの意味を、私は知っている。

彼女が浮かべる、その悲しそうな表情の意味を。

彼女が求めている物を。

「なら、お前はどつする？私の望みを叶えるのか？」

そんな私の答えに彼女はさらに問いかける。

仮定だらけの会話。

だけど、その会話は完全に成り立っている。

彼女は私の性格を熟知している。

変わってしまったとしても、彼女には私の事は全てばれてしまう。

そして、私もまた彼女の性格を熟知している。

彼女がどんなふうに考え、どんなふうに感じ、どんなふうに決断するかを。

どんな考えをした時に、そんな表情をするのかさえも。

「それだって、分かっているんだろう？俺がどんな答えを出すのかぐらい」

本当にお互いの距離は近い。

きつと、私と千鶴は似たもの同士なんだ。

以前の私と千鶴の表の表情は全く異なったものだったかもしれない。

だけど、根っこにある深い部分ではそっくりだったんだと思う。

きつと、私たちはお互い、お互いの鏡に映った自分を見ていたんだと思う。

だから、お互いの考えている事が手に取るように分かる。

そして、今は、以前よりももっと似ている。

あの時よりももっと私たちは似ている。

「そうだな。本当に嫌になるぐらいの同調率だな」

そんな私たちを皮肉りながら、彼女はそう言って笑う。

同じく私もそう思う。

本当に嫌になるぐらいの同調率だ。

彼女は、腕から手を離すと、踵を返すと、部屋に向かう。

そして、私はその後へと続く。

一度だけ入った事のある彼女の部屋。

だけど、あの時とは状況が全く違う。

そして、部屋に入った後に起こる事も。

あの時は、こんなふうになるとは、思わなかった。

あの時の私は何も考えていなかったから。

何も考えられないようにしていたから。

彼女が部屋の鍵をあげ、中に入る。

私もそれに続くようにして、入る。

相変わらずファンシーグッズに埋め尽くされる部屋。

彼女は、部屋に着くと、ベッドに腰掛ける。

それと同時にいったん目を瞑ると深呼吸する。

こういつときの覚悟はきつと男よりも女の方が大きいと思う。

男になんて、覚悟はさほど必要にならない。

それはきつと男よりも女の方が精神的に強いから。

いろんな辛い事にも耐えられるようにできているから。

私は彼女の隣そつと腰掛けると、手を握る。

それが私からの合図。

そして、彼女は、私にキスをした。

第十三話 おまじないと古い思い出

暗闇の中、私は目を覚ました。

ベッド脇にある時計を見ると時刻は深夜。

行為を終えると同時にどうやら眠ってしまったらしい。

まあ、精神的にダメージが大きかったのだから仕方がない。

お互いぼろぼろの心をさらけだし合ったのだ。

余計に傷つかないはずがない。

彼女もまだ眠っている。

初めての行為のせいもあるだろうが、やはり、原因は彼女も同じ。

決して愛してもらえてない。

そんな男との行為。

一方通行の想い。

それを抱えながらの苦痛だけの行為。

ずたずたになるのは当然の事。

本当に悪い事をしたと思う。

できることなら、彼女の事を愛せれば良かった。

なんて、それは私の勝手なエゴか。

どうせ、私は彼女を愛する事は不可能なんだ。

臆病で寂しがり屋な私には彼女の事を愛せない。

強い人間じゃないから割り切る事なんて出来ない。

私はそつと彼女の髪を撫でる。

そういえば、私が初めて頭を撫でたのは、伊緒だった。

あまりにも行動が可愛すぎて思わずしてしまったのだ。

それを見て、千鶴は呆れたような顔をしていた。

そして、伊緒は怒っていた。

子供扱いされているようで。

だけど、私の中では、伊緒は子供みたいなものだった。

からかいがいのある奴だった。

でも、たぶん、本当に子供だったのは私。

何も知らないで、何も分からないで、偉そうにしていた。

ちょっとした過去がある事に、酔いしれて、自分は違うのだと勘違いしていた。

何一つ変わらないのに。

何一つとして、自分が憎んでいた人と同じだったというのに。

今思えば、あの頃の私は本当に幼かった。

千鶴はそんなところに惹かれたのだろうか？

私は千鶴じゃないから分らない。

ただ、私は幼さの残る人が好きだった。

見ていて微笑ましいから。

心の奥底まで暖かさが染みこんで来るから。

そして、沙希さんもそうだった。

初めて見た時の彼女は本当に幼かった。

純粹で、私のように汚れていなかった。

とても羨ましかった。

だけど、それ以上に、自分に近づいて欲しくなかった。

自分に近づく事で汚してしまいそうで。

私は否定的な男。

何もかも否定してしまう。

だから、素直に受け入れる事が出来ない。

それが、彼女にも移って欲しくなかった。

彼女は彼女のままであるがままに受け入れて欲しかった。

それこそが、彼女が彼女であるために必要なものだから。

だから、それを失わせたくなかった。

だけど、それと同時に、逆に自分も変わりたい。

むしろ、私が彼女のようにになりたい。

そう思っていた。

そつと、彼女の額にキスをした。

おまじない。

遙遠い昔。

『私』が『俺』でなく、まだ『僕』だった頃。

まだまだ幼かった頃。

そう言つて、額にキスをしている姿を見た。

それを見て、私は本当に羨ましかった。

泣いていた息子に母親がしていたことだった。

私も母親にしてもらいたかった。

だけど、あの母親はそんな甘い顔はしてくれなかった。

ただ

『いつまでも泣いてるんじゃないの、男の子でしょ!!』

声を上げるだけ。

ムチしか使わない人だった。

だから、私はそうしてもらってるのがとても羨ましかった。

いつもいつも、その子にそう言っていた。

その子は私の友達だったから。

初めての友達。

いつも一緒だった。

何をするのも一緒だった。

親友だった。

そして、そんな親友がそうやって、母親の愛を一身に受けている姿を見て、本当に羨ましかった。

自分の持っていない物を持っていて羨ましかった。

だけど、なぜかその思いは嫉妬にはならなかった。

自分が持っていない物を持っていて羨ましいはずなのに、そんな物抱かなかった。

もしかすると、分かっていたのかもしれない。

私には、その親友しかいないと言う事が。

もし嫉妬して、その仲が壊れてしまえば、孤独に陥りかねないと。

実際、その親友がいなくなってから、私は孤立していた。

友達だっていた。

だけど、どうしても、深く突っ込めなかった。

深く突っ込もうとするとところでどうしても問題が起きた。

余計な事ばかりを言う性格。

どうしても、それがネックになっていた。

だけど、それは臆病な心持から来るものだった。

壊れる事を恐れて、自分から壊そうとしていたんだと思う。

失う事で味わうあの絶望感を感じたくはなかったから。

目の前が真っ暗闇になったあの瞬間を思い出したくはなかった。

親友が消えたあの瞬間を。

あの時の私は壊れた。

初めて、自分でも分かるほど壊れた。

壊れてしまった私は現実から逃げ出した。

周りと言った。

子供だから別れの意味を分かっているのだと。

だけど、それは違う。

子供だって、別れの意味ぐらい分かっている。

だからこそ、私は逃げ出した。

怖かったから。

現実を受け入れなくなかったから。

受け入れた瞬間にどうなるか分からなかったから。

それを分かってくれたのは、皮肉にもその親友の母親だけだった。

いつもその親友と遊んでいた場所で一人でいたとき。

そのとき、壊れたように泣いていた私を見つけた彼女だけは、分かってくれた。

同じ傷を持っていたから。

そして、彼女は、私という人間を少しは分かってくれたから。

だから、私を……

私の額にキスをしてくれた。

自分の息子にしていたと同じように、私にも。

彼女にとってのそれが精一杯の愛情の証。

彼女がああして、息子の額にキスをしていた意味。

子供の頃は分からなかったけど、今は知っている。

贖罪。

別れを生み出してしまった事への。

だから、その贖罪と精一杯の愛情。

そして、私もその母親と同じ事をしている。

彼女への贖罪と精一杯の愛情。

今、こうしてここにいるのは、それ以外なんでもない。

「相変わらず、その眉間にしわをよせる癖は治っていないみたいだな。」

不意に枕元から声がした。

彼女だ。

どうやら、起きたらしい。

「そんなに、俺はいつも眉間にしわを寄せていたか？」

けれど、彼女の言葉は疑問だった。

彼女を裏切ってしまったときからの私ならその可能性はある。

だけど、それ以前、彼女と一緒にいた頃はそんな感じではなかったはずだ。

「ああ、お前も周りも気付いていないみたいだったがな。特に周りはお調子者で馬鹿みたいなお前しか知らないだろうから、当然だけど、私は良く見たよ。何かに絶望したような目。私と同じ目をし

ていたよ」

けれど、そんな私の疑問はあっさり消される。

彼女は、寂しそうに笑うと、そう言った。

自分と同じ目。

それが、辛いのだろう。

彼女は私と同じなんだ。

自分と同じになって欲しくない。

私が、沙希さんに、同じになって欲しくないように、彼女は私が同じようになって欲しくなかったのだろう。

私も千鶴も人が好きだから。

だから、こんなくらい闇の中でしか生きられない人間になって欲しくないのだ。

壊れかけの心を守るような人生を歩んで欲しくないのだ。

私は、彼女の肌をさらした肩をだくと

「俺も失ったからな。一番大切な物を。唯一の心の支えを。だから、時にはそんなふうにしていないと、やってられなかったんだろうさ」

苦笑気味にそういう。

結局はそう。

どれもこれも自衛手段。

壊れそうな心を必死になって守ろうとしていたのだろう。

そうやって、少しずつ悲しみを払拭させようとしていたのだろう。

「そうだろうな。私もお前も本当に弱い人間だからな。」

その答えに満足したのだろうか。

彼女は、そう返すと、目を閉じて、また、眠りにつく。

だけど、私はそれに頷けない。

確かに、私は弱いのは、事実だ。

だけど、千鶴は決して弱くない。

私と比べるまでもなく強い。

まあ、千鶴は頷かないだろうが。

もう少し、自分の価値を考えて欲しいものだ。

絶対に自信を持ってもいいものなのだ。

私は、もう一度彼女の額にキスをする。

今度のは、おやすみのキス。

本当の恋人じゃないから、額。

唇には出来ない。

身体を重ねるときにはもちろん、唇にした。

だけど、今はどうしても、額にしたかった。

ちゃんとした理由は分からない。

ただ、こうするほうが正しい。

なんとなく、そう思ったから。

第十四話 二人の朝食

目が覚めると、隣には千鶴の姿はなかった。

その代わりに、トーストの芳ばしいにおいがする。

私は、床に散らばる服を着なおすと、キッチンに向かう。

彼女の部屋もワンルーム。

申し訳程度につけられたキッチンに、彼女はいた。

どうやら、ベーコンエッグを作っているらしく、ベーコンと卵をフライパンで焼いている。

けれど、その手は、どこか恐る恐るで、手つきがあやしい。

たぶん、こういう事になれていないんだろう。

私は、そっと彼女を押しのと、続きを受けもつ。

その際彼女が文句いいたげな顔をしたが、

「火傷でもしそうな手つきじゃなくなっただけにして」

ぱつぱつとそれを切り捨てると、作業に移る。

とはいえ、やる事はほとんどない。

そもそもベーコンエッグなんて代物、ささつと終わってしまうもの。

そういうものだから、彼女も挑戦したのだろう。

まあ、失敗しそうな感じがしたけれど。

私は、さつさと焼き上げたベーコンエッグを皿に並べると、彼女に手渡す。

それを彼女はテーブルに置く。

これが一番の理想だろう。

そうして、並んだ朝食を見て、彼女はため息をついた。

まあ、何を思っているのかは、すぐに分かる。

どうせ、相変わらず家事万能だと思っているんだろう。

「さ、さつさと食おうぜ」

だけど、そんなことはいい加減昔聞き飽きた。

裁縫に始まり、料理から、お菓子作りまで。

ことあるごとに、そういわれたのだから、耳たこだ。

「そうね」

そんな内情を彼女も気付いたのだろう。

余計な事は言わず、頷き、目の前に並ぶ皿へと向かうと、トーストをほおばる。

それにあわせて、牛乳も飲む。

相変わらず、乳製品が好きなようだ。

私とは全く逆。

私は乳製品はあんまり好きじゃない。

料理として使う分にはいいけど、牛乳だけは、どうしても、それ単品で飲む気は起きなかった。

まあ、嫌いだからと言って飲まないわけでもないけれど。

やはりバランスを考えると、どうしても飲まなければ行けないときがあるから。

「にしても、相変わらず、お前は寝起きが悪いな」

私のがんびりと考え込んでいるうちに、あらかた片付いたのだろう。

くすりと笑うと、そういう。

どうやら、私が寝ているうちにいろいろとしてみたようだ。

「まあ、低血圧だから仕方ないさ。それに、今は昔ほどひどくはないだろう?。」

だけど、それに気付かないのは、私としては仕方ないのだ。

どうも体質的に朝には弱いのだ。

「確かに。昔はほんとひどかったよな。寝起き一発の声はだいた猫なで声だもんな」

けれど、そんな事は彼女にとっては、からかう材料でしかないのだろう。

昔の事を穿り返してくれる。

「仕方ないだろ！！寝起きは意識がしっかりとてないんだから」

本当にいい性格をしている。

人の恥を堂々と言ってくれるのだから。

「でも、正直びつくしたぞ？起こそうと思って、声かけたら『うん？もうちよっただけ寝かせて？お願いだからあ』なんて言い出したときは」

しかも、やめてくれる気配はない。

どこまでも、私の事をいじくり回す気なのだろう。

いつもと変わらず。

今までと変わらずにいるために。

「なあ、雪野さんを紹介してくれないか？」

食後のんびりしていると、唐突に切り出した。

いったいどうしたのだろうと思って、彼女表情を見る。

けれど、すぐに分かった。

彼女の表情はとても真剣だった。

先ほどまでののんびりとしていたものではない。

ならば、答えは一つしかない。

私の事だろう。

今の彼女がそんな表情をする理由はただ一つ。

私の事について、彼女に何か言うのだろうか。

そして、きっと、彼女はその時に謝るのだろうか。

奪ってしまつてすまないと。

「わかった。今から彼女に連絡するよ」

そんな事をしたところで、何の意味もなさないだろう。

沙希さんとして、全てを納得しているのだ。

今更そんな事を言っても何にもならない。

だけど、それでも、かなえてやりたいと思った。

私に出来る事は全てかなえてやりたいから。

かけた電話に彼女はすぐにでた。

だけど、その声は暗い。

そのことに、胸が痛むが、無理やりそれを押し込むと、事務的に話を進める。

無事に、了承を取ると、

「んじゃ、行こうか？」

そう言つて、彼女を促す。

それに頷いた彼女は、支度を済ませ、部屋を出る。

そして、私と彼女は、沙希さんの部屋に向かう。

その途中で会話はなかった。

正直、どんな会話をすればいいのかが分からなかったからだ。

そんなきまずい雰囲気の中、目的地に到着した。

呼び鈴を押して、沙希さんと呼ぶ。

部屋から出てきた、彼女は、私と千鶴を交互に見ると、困ったような顔をする。

それもしかたないだろう。

初めて会ったのだ、会話に困らないはずがない。

なので、私は、沙希さんに一言二言言っておく。

まあ、内容はいたってシンプル。

遠慮はしない事。

それだった。

千鶴自身悪い事をしたと思っている。

特に昨日の事はお互い良い事だとは思っていない。

だからこそ、遠慮はしないで欲しい。

良い事は良い、悪い事は悪い。

そう判断して欲しい。

それを千鶴は切望しているのだ。

私はその場から離れる。

今、ここに私がいても意味がない。

むしろ邪魔でしかない。

なら、さっさと消えてしまったほうが話しがスムーズに進むだろう。

自分の部屋に戻ると、コンポをつけて、音楽を流し、ベッドに寝転がる。

正直かなり疲れた。

今でも、いろいろと考えてしまう。

考えたって何も変わらない事ぐらい分かっている。

全ての結末は一つ。

もう終わりは確定している。

それが分かっているからこそ、私は今こうしている。

決して後悔なんてしないように。

後悔すれば、きっと壊れる事が分かっているから。

そして、壊れればきつとたくさんの人に迷惑をかけるから。

壊れた時の私は本当に冷たくて、容赦がなかった。

同じ私でも、全く別の私だから。

だから、壊れたくない。

人が好きだから。

沙希さんが好きだから。

もう傷つけたくないから。

だから、私は自分勝手に行動する。

それが千鶴を苦しめる事になっていると分かっているながらも、それでもやめられない。

私は、起き上がると、クローゼットの奥に隠していた中学の時のアルバムを取り出す。

隠していたのは沙希さんに見られなくなかったから。

今とは違って愚かだった頃私を。

傷つける事しか知らなかった頃の私を。

いろんな人間が写っている。

仲の良かった人。

仲の悪かった人。

話した事のある人。

話した事のない人。

いろんな人が写っている。

そして、その中には、しっかりと私と伊緒と千鶴、里香の四人が写っている。

とても幸せそうに笑っている四人。

本当に仲のよさそうな四人。

そして、それが故にぼろぼろになっていく四人。

哀れだった。

滑稽だった。

何もかもが。

中学時代の事は何もかもがくだらない。

愚かな考えをして、愚かな選択をした。

そうすれば、こんな事にはならなかった。

本当は、あの時、告白をしておけば良かったのだ。

そして、私が傷ついて置けばよかったのだ。

そうすれば、恐る恐る近づく事なんてなかったのだ。

壊れる事ばかりを恐れて。

守る事ばかりを考えて、先を見えていなかった。

もし、あの時、私が告白していれば、全てが変わっていただろう。

誰もが苦しまずにすんだ。

きっと、沙希さんとは出会えなかっただろう。

きっと、私は絶望を手にする事になっただろう。

だけど、それでいい。

今のように、誰も彼もが傷つくよりかはましだ。

私はいつも傷ついて生きてきた。

裏切られて、捨てられて、いつも一人だった。

傷つく事には慣れていたはずだった。

だから、私一人が我慢すれば、こんな終わり方はしなくても済んだ

はず。

少なくとも、沙希さんが傷つく事はなかったし、伊緒もすっきり出来たと思う。

千鶴も、安穩な生活を向かえる事が出来ただろう。

なのに、私は……

私は逃げてしまった。

愚かにも逃げる選択をしてしまった。

全ての始まりはやはり中学の時。

あの時の選択が間違いだったのだ。

どうせ、伊緒が誰かのものになる事は分かっていた。

失恋する事は最初から分かっていた。

ならば、告白すれば良かったのだ。

自分の中ではじめをつければよかったのだ。

本当に悔しい。

時間は戻せない。

これほどまで、自分の無力さが胸にのしかかる。

心の中にいるもう一人の私が嘲笑う。

冷たく容赦のないもう一人の私が。

そして、もう一度壊れろと叫ぶ。

そうすれば、自分が出てくるから。

全てを終わりに向かわせる自分が出てくるから。

もう一人の私は何も生み出さない。

育まない。

ただただ、破壊をつくし、絶望だけを撒き散らす。

自分自身に。

もう一人の私は私が抱える闇の全て。

人を憎み、恨み、嫉み、そして、自分自身だけを愛している。

だから、破壊するだけ。

決して何も生み出さない。

私を孤独にするだけの存在。

それだけのために存在する。

人形にするための存在。

沙希さんと出会う前の私。

それは生きた人形。

壊れてしまった哀れな人形だった。

全てを否定して、全てを拒絶していた。

孤独の中で生きていたかった。

傷つく事と裏切りを恐れ。

精神が壊れる事を恐れ。

私はそつと中空へ手を差し伸べる。

その手をそつと握る人がいる。

千鶴だった。

もう話しは終わったのだろう。

「なんて顔をしているんだ？今にも死にそうな顔をして」

だから、ここにいます。

そして、私の心配をしているのだ。

「俺はもしかすると死にたいのかもしれないな。ただ、死ぬ事の愚かさを知っている分死ねないでいる。生きたくても生きていけない人の悲しみを知っているから」

そんな彼女に返す言葉。

真実の言葉。

私はきつと死を望んでいる。

死ねば何も考えられないから。

死こそ、何も生み出さず、何も育まないから。

生への輪廻へとは帰らない。

それは私が罪を背負ったから。

罪人にはきつと輪廻は許されない。

永遠の苦しみが待っているだけ。

だから、死ねない。

私は幸せになりたいだけだから。

苦しみたくないただけで、死にたいわけではない。

「お前はいつもそうだな。その瞳に何を写している？世の中の真理

か？時々、私はお前が分からなくなる。自分でも言うのはなんだが、私の方が、お前よりももっと深い絶望の世界にいる。けれど、お前の方がもっと深い闇の中にいる。それはどうしてだ？」

そんな私を見て、彼女は悲しそうに言う。

どうして、そこまで絶望のただなかにいようとするのか、と。

「それは、俺が弱いから。弱いから、ちょっとした絶望でも、すぐに心が過敏に反応してしまうからさ」

だけど、それは決して私が優れているからではない。

むしろ、劣っているから。

私自身が欠陥品だから。

母親は言った。

どうしてこんな子供に育ったのか。

私はこんなふうに育てたつもりはない。

私はもっと良い子に育てたはずなのに。

そう言った。

そして、それは私が欠陥品である事の証明。

どこまでも欠陥だらけの存在。

だから、心もまた欠陥品。

臆病で弱い、欠陥だらけの部品。

だから、ちょっとしたことで、絶望してしまうのだ。

「いや、お前と私の心の弱さは同じ。お前と私は同じなんだからな。だから、もしかすると、お前の方がむしろ、不運なのかもしれない。ここで終われないお前は」

けれど、そんな私を彼女は抱きしめると、よりいっそう悲しげにさういう。

しかし、それは違う。

私の方が絶対に不運ではない。

千鶴の方が絶対に不運なのだ。

それだけは間違いない。

そして、心の弱さも私の方が弱い。

弱いのだ。

だけど、何も言えない。

彼女が何も言わせてくれない。

いつもそうだ。

私が何か言おうとすると、今にも壊れそうな顔をして、私を見る。
そんな顔をされたら何も言えない。

言い出す勇気が起きない。

私の言った言葉で壊れはしなないかが怖くて。

「最後に、雪野さんと話せてよかったよ。これで、心残りはない」

彼女は、そういうと、私から離れると、部屋を出る。

香水の甘い香りだけを残して。

第十五話 消え失せていったもの

目の前はただただ絶望のみ。

そんな世界は常だった。

私がその世界を望んでいたから。

既に夢も希望も否定していたから。

だから、何も受け入れなかった。

自分から壊れるようにした。

伊緒の時もそう。

私が告白しなかった本当の理由。

それは関係が壊れる事が怖かったからではない。

むしろ、壊れる事を望んでいた。

私はその関係の心地よさに恐れていた。

その空間になれて、その空間が心に染みついた時。

そして、そんな時に、その空間が壊れてしまったら、自分はきつと壊れる。

それが怖かった。

きっと、私は無意識のうちに気付いていたんだと思う。

それは、千鶴も同じ。

彼女もやはり私と同じ傷を持つ。

だから、そんな恐怖を味わいたくなかった。

そのために、告白しなかったのだ。

壊すために。

自然崩壊をさせるために。

心の中に染みつく前に。

自分自身を守るため。

「泣いてもいいんだよ？」

隣にいる彼女は、私にそつと言う。

その彼女はすでに涙をこぼしている。

今の私は実家に帰省中。

夏休みに入ったから。

そして……

彼女の……

千鶴の葬式が行われているから。

「泣かないさ。俺は千鶴の前でだけは泣かない。それがせめてもの手向けだ」

私は、棺に眠る彼女の頬をなでる。

それは、どこまでも、奈落の底までつき落としてくれるほど、冷たく硬い。

あの暖かくて柔らかかった頬ではない。

完全に彼女は死んでいる。

彼女の正式な病名は聞いていない。

私が知っている事はたったの二つ。

先天的な遺伝子異常。

彼女は遺伝子上の爆弾を抱えており、それが爆発次第死ぬ。

そして、どんなに長く生きたとしても、24歳と言っ事。

けれど、彼女は、そこまで生きられなかった。

普通の生活を望んだから。

あくまでも、その数字は病院で絶対安静にしてた場合の事。

普通の生活をするとなれば、やはり疲労が重なりずっと短くなる。

彼女が抱いた闇の原因。

それが、これだった。

確実に決まった死。

彼女は生きる意味を失った。

たった二十数年間で何ができる？

いや、何も出来やしないさ。

なら、何もなせない人生にどんな意味がある？

意味などない。

彼女は、生まれながらにして生きる意味を失った。

だけど、死ぬ事も出来なかった。

死ぬ事が怖かった。

そして、それと同時に、悲しむ両親の事を考えると、どうしてもできな

彼女は、笑いながら、そう言った。

本当に悲しそうに。

どこまでも壊れそうな顔をして。

その瞳に絶望を写して。

そこにあるのは、私だった。

私も子供の時に、生きる意味を失った。

人は幸せになるために生れ落ちた。

そう聞いていた。

そして、そう信じていた。

だけど、私には、幸せは訪れなかった。

いや、世間一般的に裕福な家庭に生まれたのは幸せなのかもしれない。

だけど、私はそれを幸せだとは思えなかった。

誰にも愛されていなかったから。

誰もが、私の事を見下し、自分の道具としか扱ってくれなかったから。

だから、私は生きる意味を失った。

人は幸せになるために生れ落ちる。

だけど、私は幸せにはなれない。

誰にも愛されず、唯一の友ですら、手のひらから砂のように零れ落ちた。

私の手には、幸せはなかった。

あるのは、絶望のみ。

その瞬間に私は生きる意味を失った。

それでも、生にしがみついたのは……

死ぬ事が怖かった。

そして、死んだ後の周りが怖かった。

誰も、きっと悲しむ事はない。

そんな事は分かっていた。

ただ、笑われるのが怖かった。

死を悼むのではなく、笑われてしまう事が怖かった。

私と言う存在を否定されるのが怖かった。

だから、私は死ねなかった。

何度も死のうとして、結局出来なかった。

だから、望んでいた。

殺される事を。

誰かに殺される事を望んでいた。

自分で死ぬ勇氣はない。

だから、殺して欲しかった。

誰でも良いから殺して欲しかった。

そうすれば、終われるから。

そして、誰かがその死を悼んでくれるから。

決して意味のない死ではなくなると思ったから。

彼女もそうだったのだろうか？

千鶴も同じように殺される事を望んでいたのだろうか？

いや……

そんな事はもうどうでもいいか。

もう、彼女は死んでいる。

殺されるがどうのこうのなんて事は関係ない。

彼女は本当に安らぎに満ちた顔をしている。

きっと穏やかな死なのだろう。

ならば、それでいい。

私の罪も消えた。

もう、これで、何も考える必要はない。

ただただ、惰性で生きていけばいい。

千鶴が望んだように生きていけばいい。

私は幸せになる。

千鶴の分まで幸せになる。

それが、彼女の本当の姿を知る者の務め。

彼女の存在した事を消滅させないために。

私は、彼女の棺から離れ、そのまま会場を後にする。

隣には彼女がいる。

だけど、何も言わない。

今の私に何かを言ったところで、どうにもならない事ぐらい彼女も分かっているのだろう。

そんな彼女の優しさに感謝しつつ、会場を出た足で、そのまま駅へと向かう。

実家に帰ってきたのは、彼女の葬儀に出るための事。

なら、もうここにいる必要はない。

どうせ家に帰っても、母親のお小言が出るだけ。

それならば、さっさと帰ってしまったほうが良い。

今の私が母親に会つと、はっきり言って何をするか分からない。

情緒不安定な状況で、まともに会話を成立させる自信なんてない。

ならば、無駄に喧嘩の種を蒔く必要もない。

私は、海岸沿いの道を歩く。

この道は駅までは遠回りになる。

だけど、帰る前に、この世界を目に焼き付けて起きたい。

千鶴がいたこの街の姿を。

第十六話 手渡された手紙と千鶴の想い

「ねえ、ちょっと寄り道しよう?」

不意に彼女が横からそう言った。

口調も言葉ぶりも軽いのだけれども、表情は真剣だった。

何かいいたいことでもあるのだろうか。

私は、頷くと、彼女の後をついていく。

彼女は砂浜へと降りると、どんどん進んでいく。

そこはとても懐かしい風景。

彼女とあるいた道。

私が初めて誰かに教えた道。

彼女だけが知っている道。

そこは、あの秘密基地へとつながる道。

彼女は、岩場をよじ登り、そこに座る。

私もそれにならって、彼女のようによじ登り、隣に座る。

そして、彼女の言葉を待つ。

だけど、彼女は何も言わない。

やはり、彼女も先ほど言ったように、何もかける言葉なんてない事ぐらい分かっているのだろう。

ただ、それでも、どうしても、何かを言いたかったから、ここによんだのだろう。

彼女は優しいから。

ずっとずっと、悲しい顔をしておいて欲しくないから。

自分だって、苦しいのに、それでも我慢する。

そんなところは、千鶴に良く似ている。

だけど、千鶴よりもずっとずっと幼い。

闇を知らないから。

「これ、千鶴さんから預かってた手紙」

そして、ようやく、彼女が口を開いた。

「私が、聡の傍にいなくなったら、渡してって言われてたの……」

けれど、それは、余りにも事で、うまく反応できなかった。

「はい、聡君」

それでも、彼女が手渡した手紙をかるうじて受け取る。

そして、封を切る。

その手は、自分でも分かるほど震えている。

怯えている。

何に対してかは全く分からないけれど、私は確かに怯えている。

そして、私はそつと便箋を開くと、中身を読んだ。

これを読んでいるという事は、ついに私も死んだようだな。

まあ、私としてはほつとしているだろうよ。

いつ死ぬのだろうか、恐れて眠らなくていいんだからな。

なんて、そんな事を言ったら、お前が悲しむかな？

お前は本当に優しい奴だからな。

いつもいつも、自分勝手だと言っているけど、お前の自分勝手はホントに優しすぎるよ。

お前は私と同じか、それ以上に深い闇の瞳を持っているくせに、ホントに優しい。

そんな事を言ったら、お前も否定するだろうけど、言わせてくれ。

お前は本当に優しい。

だから、正直に言うと、お前と一緒に眠った日は、本当に久しぶりにゆっくりと眠れた。

ぐっすりと眠れたんだ。

あれから、何度か同じベッドで寝たが、いつもぐっすりと眠れた。

お前のおかげだ。

本当に、お前には感謝しても感謝しきれない。

私はお前に何もしてやれなかったのにな。

むしろ、傷つけてばかりだったのにさ。

あの時だって、そう。

私はお前がどんな反応するのかくらい予想できた。

本当はそんな事を言ってはいけない事くらい分かっていた。

言えば、絶対にお前を傷つけると言う事くらい分かっていたのに。

だけど、私は、言ってしまった。

もう、これ以上一人でいたくはなかった。

甘えさせて欲しかった。

だから、教えたんだ。

お前と秘密を共有したかった。

ホントに浅ましい考えだった。

おかげで、お前は壊れた。

私が思っていた以上にひどい状況になった。

初めて、壊れたお前を見た時、本当に後悔したよ。

もう死んでいるのと大差がなかったんだからな。

だけど、私はそれでも謝れなかった。

このまま罪を背負って死んでいこうと思った。

それでも、私はどこまでも愚かなんだな。

結局、お前を追いかけていつてしまった。

高校の時と同じように、大学まで。

お前の大学は、私の学力じゃ、足りないから、わざわざ近郊の私立にまでして。

自分でもほとほと呆れるよ。

だけど、結局会おうとすることはできなかった。

やっぱり、怖かったから。

でも……

でも、再会できた。

そのときばかりは神様に感謝したよ。

生まれたときは、罵詈雑言ばかり並べてたのにさ。

ホント調子いいよな。

でも、それぐらい、感謝したかったんだ。

お前とまた傍にいられるから。

お前が傍にいたと言ったときは本当に嬉しかった。

心の底から幸せだった。

私は本当に幸せだった。

お前はよく言ってたよな。

人は幸せになるために生まれてくるって。

どうやら、それは私も同じのようだった。

確かに人より短いかもしれない。

だけど、それでも、幸せだった。

ようやく、私にも生きる意味と言つものが見つかった。

お前と同じようにようやく普通に生きていける。

そう思ったよ。

お前も幸せなんだろう？

雪野さんがいるから。

私の事はもういい。

私は、もう十分お前に愛された。

だから、彼女の事を愛してやれ。

守ってやれ。

お前には、それが出来るだろう？

なんと言つても、お前は私が愛した男なんだ。

良い男なんだから。

だから、守ってやれ。

お前は強い。

いつもいつも、お前は自信がなくて、弱いといっているけど、本当は強い。

私の傍にいてくれた事がその証だ。

お前が私の事を強いと思うのなら、お前も同じだ。

お前も強い。

傷ついても、立ち上がってくるお前は強い。

誰かを幸せに出来るお前は強い。

だから、自信を持て。

そうすれば、きっと大丈夫だから。

お前は、ただ刷り込まれているだけだ。

母親の言葉に騙されているだけなんだ。

もう、母親の言葉の呪縛から飛び出さなくてはいけないんだ。

他の誰でもない私が本当のお前を知っている私が言うんだ。

だから、信じて、強いと思ってくれ。

そうじゃないと、私はいつまで経っても安らかに眠れない。

愛するお前が、いつまでも苦しんでいる姿なんて見ていたくないからな。

なんて、卑怯か。

こう言うと、お前はそう思うしかないもんな。

でも、卑怯だろうと何だっていい。

私はお前には、そう思っておいて欲しいんだ。

そのところだけは、分かってくれ。

それじゃあな。

後ついでに……

この手紙は、処分してくれてかまわない。

雪野さんとして、嫌だろう。

死んだ女の手紙をいつまでも、大事に持っていていられるのは。

気高くも優しい愛する男・聡へ

その男の幸せを願う女・千鶴より

第十七話 闇にのまれた心

限界だった。

今まで必死につなぎ止めていたもの。

それがあっさり引きちぎられる。

しっかりと鎖で縛り、南京錠で鍵を閉めていた心。

だけど、その鎖、錠はあっさり崩れ去る。

錆びた鉄が風化するかのごとく。

粉々に砕け散る。

もうそこには、何もない。

さらけ出された心を守るものは何もない。

だから、私は……

「あああああああ！！」

壊れた。

胸が痛い。

身体中どこもかしこもが痛い。

こんな想いをするのは何年ぶりだろうか。

こんな激痛、何年ぶりだろうか？

もう一人の私がひっそりと顔を出す。

そして

『死んでしまえ』

そうつぶやく。

けれど、その声は、私の心の奥底から、響く。

どこもかしこにも、響く。

耳をふさいでも、心を塞ごうも、聞こえてくる。

私は分かっている。

今ここで死ねば、楽になる事は。

苦しむ事はない。

彼女への罪はもうない。

今の私は背負うべき罪がない。

だから、死ねば、ただただ安穏な世界へと旅立てる。

それが分かっているから、もう一人の私はそうささやきかけてくる。

「黙れ！！私は、私はお前に屈したりはしない！！」

私は、思わず叫ぶ。

胸をかきむしり、必死になって叫ぶ。

隣に、彼女がいるが、そんなのは気にするだけの余裕はない。

今は、必死にもう一人の私と戦わなくてはならない。

もしここで、負けてしまえば、私は死ぬ。

だけど、死ぬわけにはいかない。

千鶴はそれを望んでいない。

そして、私自身もそんな事は望んでいない。

望んでいるのは、暗き闇。

彼女と私が抱える、現実を……

知識を得すぎた事によって生まれた闇。

絶望しかその手にもたない闇。

闇はただただ終焉へと導くだけ。

だから、私を死へと導く。

終焉へと導こうとする。

『なら、お前はこれからどうするっていうのだ？今更彼女を本当に愛せるのか？お前は知っているはずだ。自分の心を。そして、現実の儚さを』

そんな抵抗をする私に、彼はさらに囁きかける。

最も深い傷を。

『お前は本当は誰を愛していた？お前は本当は何を望んでいた？』

そして、彼は続ける。

私を絶望に叩き落とすために。

『お前は分かっているはずだ。お前が幸せになんてなれない事は。人が幸せになんてなれるはずがないと言う事を』

どんどん、私を追い詰める。

悲しいだけの言葉を、どんどん囁きかける。

耳を塞ごうにも聞こえる声に私は怯える。

どんどん心が闇に支配されていく。

死を望み始める。

『お前は知っているはずだ。いったい彼女から何を学んだ？何を知った？お前は無知ではない。だからこそ、現実を知っているはずだ。人は結局己しか愛せない事を。彼女だつて自分を愛するからこそ、お前を引きずり込んだ。そして、お前は自分を愛しているからこそ、彼女から逃げ出した。自分の思いからも逃げ出した』

そこをたたみかけるように、彼は続ける。

嘲笑うように続ける。

私は……

もう戦えない。

言い返す言葉がないから。

私は決して無知ではない。

だから、現実を知っている。

そして、その現実を知っているからこそ、夢も希望も持てず、ただ、現実を眺める事しか出来なかった。

夢も希望を捨てる事しか出来なかった。

私は瞳を閉じる。

全てがどうでも良くなってきた。

最初から分かっていた。

この結末であることは。

彼女の再会し、彼女と共にいると決めた瞬間に予想はついていた。

これこそが死へのきっかけになるだろうと。

だから、また絶望したのだ。

あの時、一人部屋でアルバムを見た時に。

そして、後悔したのだ。

選ぶ事のできなかった事に。

私は立ち上がると、そのまま下へと飛び降りる。

彼女がびっくりして、立ち上がるけれど、気にならない。

あまりにももの衝撃で、足首を少々痛めたけれど、それも気にならない。
い。

心が麻痺している。

全てを拒絶している。

砂浜を進み、やがて海の中へと入る。

夏の日差しを浴びて、身体中が熱いはずなのに、なぜか寒かった。

凍えそうなほど寒かった。

いつだっただろうか？

今のように海の中に入り、自殺をはかったのは。

もう、覚えていない。

何も覚えていない。

記憶がどんどんなくなっていく。

これは、以前からそうだった。

自分が何を考えていたのかすら分からなくなる事があった。

それが、最近ひどい。

幸せだった日は記憶に残っていない。

残っているのはあの絶望の日々。

だけど、その絶望の日々ですら、うつすらと霽がかけり、ほとんど覚えていない。

だけど、それもどうでもいい。

どうせ死ぬのだから、記憶なんて残っている必要はない。

「ごめんなさい、千鶴。どうやら、私は貴女の願いをかなえる事はできないみたいです」

せめてもの心残りは千鶴の願いをかなえられなかった事。

彼女は、私の幸せを願っていた。

だけど、やはり私の心は弱かった。

全てから逃げ出してしまうほど弱かった。

第十八話 残酷な現実だからこそある未来

「ちょっと、聡君、何してるの!!」

彼女が、叫びながら、私の傍へと近づいてくる。

その目には困惑だけが浮かんでいる。

だけど、その目は……

私は嫌いだ。

余計に傷つけるから。

その目を絶望へと変えるから。

だけど、言わないわけにはいかない。

「私は、千鶴の事が好きだった」

後悔だけはもうしたくないから。

そして、千鶴がしたように、私もまた、彼女の中に私と言う存在の楔を打ち込みたかったから。

だから、残酷な真実を告げる。

「伊緒に告白もできずに、振られた後。その後、ずっと一緒にいてくれた千鶴。私をそっと包み込んでくれた千鶴。私は彼女の事が好

きだった。愛していた。そして、今もそう。私は千鶴を愛している。ただ、傍にいた事も、愛しているとも言えなかったのも、心の奥底で純粹に愛しきる事が出来なかったのも、全部私の弱さのせい。失う事に恐れを抱き、傷つく事に怯え、私は彼女を受け入れられなかった。逃げ出した。そして、彼女は死んだ。だけど、それでも、やはり変わらず、心には残る。私は変わらず、千鶴を愛してる。そんな私が、この世界に存在してどうする？ 私は幸せにはなれない。千鶴を愛しているから。千鶴が一番だから。だから、幸せになんてなれないんだ。死んだ人間を愛している私は、幸せになんてなれない。人は叡智によって絶望の淵に立たされる。

けれど、逆に無知による絶望もある。

だから、教えておきたい。

この自分の愚かさを。

なんて、それはいいわけか。

結局は、さっき言った事が全てなんだから。

「私は、沙希さんの事を確かに愛していた。守りたいとも思っていた。だけど、それはただの代わりだった。千鶴を守れない私は、代わりに沙希さんを守りたいと思った。そんな浅はかな想いを抱いていた」

結局、沙希さんは千鶴の代わりだった。

彼女は、千鶴に似ている。

それは、つまり、私にも似ている事。

彼女はきつと昔の私。

絶望を知る前の……

心に暗き闇を飼う前の私。

だから、守ろうとした。

心の闇がなければ、比較的に守りやすいから。

自分自身が望んできた事をすればいいだけのことだから。

「私は幸せになりたかった。何が何でも幸せになりたかった。心に闇を飼い続け、闇と戦い続けてきた。だからこそ、幸せになりたかった。魔王と戦った英雄は、皆から祝福される。だから、私も祝福が欲しかった。だけど、私は幸せになれない。ならば、生きていてもしかたがない。死んだほうがいい」

だけど、結局は、現実を知れば、それはさらなる絶望しか呼ばない。

幸せへとなる事はない。

誰かの代わりとして愛されて、誰が喜ぶ？

むしろ、憎むだろう。

自分自身ではなく、その他の人間として見られていたのだから。

だから、幸せになれない。

許される事などないのだ。

この私の罪は。

私は、彼女へと向き直る。

きっと傷つけてしまっただろう。

彼女には本当に悪い事をしたと思う。

絶望の淵へと叩き落したのだから。

そう思って、彼女の顔を見た。

だけど……

だけど、彼女の顔は全く変わっていなかった。

「私は分かっていたよ」

彼女は、そういうと笑みを浮かべた。

「不思議とね、私には聡君の心が良く分かった。千鶴さんと再会した後、私と別れた後。その時の表情を見たら、なんとなく分かった。私が一番じゃないんだって。でもね、それでも、変わらなかった。聡君が好きだと言う気持ちも、必要だって言う気持ちも。最初はなんでかなって思った。普通なら、絶対うらんだりするはずだしね。」

でも、一人で考えてたら分かった。聡君の私のことを見る目。それを思い出したら分かったの。確かに、代わりのような扱いなのかもしれない。でも、聡君は私のことをしっかりと愛してくれていた。私のことを見ていなかったわけじゃないって。変わりのように扱ってはいなかった。雪野沙希っていう、個人を見てくれていた。だって、聡君の目にはちゃんと私が写っていたから。私のことだけを見て、私のことだけを考えて、私のことだけを愛してくれていた。だから許せるんだって。それに、本当は、千鶴さんから、聡君を私が奪ったようなものだしね。私は千鶴さんの気持ちにも、気付いてた。聡君の事を調べまわっていたときに、知ってたの。だけど、それでも私は聡君に告白した。二人の関係をしりながら。だから、私は何も言わない。聡君が千鶴さんの事を好きでも変わらない。聡君が千鶴さんの事を好きだとしても、それでも、私のことをしっかりと見てくれるから。私のことを愛してくれると思うから。私は聡君を信じている。例え一番でなかったとしても、それでも、この世界にいる誰よりも愛してくれるって。だから、私は聡君と一緒にいる。聡君と幸せになる」

彼女はそういうと、ずぶ濡れになっている私を抱きしめる。

それがなぜか暖かった。

心の底から暖まっていつているように思えた。

「それにね」

そして、そのままの体勢で彼女は続ける。

優しく諭すように。

「聡君は昔言つてたよね。永遠はないって。人の想いは、常に終わりがあつて。昔の私はそれを怒つて否定したけど、今ならその言葉を信じられる。私が聡君へと抱く想いは、どんどん変わつていく。前までの想いは消えて、新しく違う想いが生まれてくる。それは結局、聡君が言つてた事と同じ。永遠はない。だったら、聡君の千鶴さんの事を思う気持ちもやがて変わる。私はそう思っている。だから、私は信じていられる。だって、他でもない聡君が言つたんだよ？永遠の想いはないって」

その言葉は私の胸へと深く突き刺さつた。

彼女の言っている事は正しいのだ。

今まで、何を経験してきたと言つたのだ。

そつだ。知っているはずなのだ。

永遠がないと言つ事が。

いつかは、人の想いという物は変質していくものだと言つ事を。

だから、私の想いもまた変質していくのだ。

千鶴の事はただの想い出になり、沙希さんの事だけを見るようになる事だつてあるのだ。

そこには、悲しくも儚い辛い現実だからこそ、生まれてくる可能性がちゃんとあるのだ。

私はなんてくだらない事をしていたのだろう。

これでは、私こそ無知だ。

なんて愚かなんだろう。

そして、彼女は……

沙希さんは、本当に……

本当に強くなった。

幼いと思ったが、それは全くの間違い。

闇がないと思ったが、それも全くの間違い。

私のせいで、彼女は闇を抱いたではないか。

何を今まで見てきたと言うのだ。

彼女は私よりもずっと強く、そして、大人なのだ。

闇を知り、そして、それを乗り越えた彼女。

きつと彼女は、私や千鶴よりも高みの存在。

そんな人なんだ。

「ごめんね？」

私は、彼女にそう返す。

心がぼろぼろで、声が涙混じりになっている。

だけど、絶望はしない。

虚無感もない。

あるのは、幸福のみ。

千鶴が望んだ幸福。

「そうだよ。全部忘れていた。自分が知った現実の事を。ホント、馬鹿だった。愚かだった。でも、沙希さんのおかげで目が覚めたよ。」

私はそう続けながら、彼女を抱きしめる。

私は思う。

本当に彼女が愛しいと。

何に変えても失いたくはないと。

私にとって、彼女は唯一無二の存在。

私はきっと、彼女を千鶴以上に愛するだろう。

それは、もう確定事項なのだ。

心の中から、彼女が愛しいという想いが溢れ出て、止まらない。

それこそが、私の彼女への想いの証。

他の何にも変えようのない情熱の証なのだ。

エピローグ

時が経ち、想いは変わり、全ての物が移ろい行く。

いつまでも変わらぬものはなく、永遠もまたない。

だけど、受け継がれていく物はある。

根本的な物は、結局何も変わらない。

私が伊緒を愛した想いと伊緒が私の友を愛した想い。

千鶴が私を愛した想いと私が千鶴を愛した想い。

そして、沙希さんが私を愛した想いと私が沙希さんを愛した想い。

その根本的な物は何一つとして変わらず、その周辺にあるものが変質して行く。

その移ろいの中に人は絶望を覚える。

深い深い悲しみに追い込まれて、絶望して行く。

移ろう事によって、重ならない思いが出てくるから。

そこに、別れが生まれるから。

だから、人は絶望するのだ。

「千鶴。俺はお前のために幸せになるよ」

私は、そつと彼女の墓石に触れるとそういう。

辺りは漆黒の闇に満たされる。

その場こそが、私たちに相応しいと思った。

闇を抱える二人には。

結局、あの日、私は帰らなかった。

千鶴の終わりを全て見届けたかった。

千鶴の事を愛しているからこそ、全てを受け入れたかった。

現実から目を離したくなかった。

だから、今日まで帰っていない。

「ようやく前へと進める。全てが終焉へと向かえた。永遠はない。そして、だからこそ、人は幸せになれる。それに気がついたから。だから、俺は、お前が望むように幸せになる。想いと志を同じとするお前のために。そして、俺自身のために」

私は、そう最後につぶやくと立ち上がる。

彼女に別れを告げに、今日はここに来た。

別に、二度と来ないわけではない。

きっと、何度もここには来る事になるだろう。

私が、千鶴を愛している事に変わりはないのだから。

だけど、今の思いでここにくる事はない。

だからこそその別れの言葉を告げに来たのだ。

きっと、またここに来る時には、千鶴を狂おしいほど愛した私はいない。

そこにいるのは、きっと沙希さんを心の底から愛している私がいるはずだ。

彼女に別れを告げた私は、墓地を出る。

入り口には、沙希さんがいた。

心配した彼女はここまで着いてきてくれたのだ。

まあ、そんなものは、必要ないと言えば、必要ない。

だけど、それで彼女の気がすむならと思って、着いてきてもらったのだ。

「終わった？」

彼女は、少しだけ心配そうな顔をしている。

彼女は信じていると言った。

そして、一番でなくても良いとも言った。

だけど、本当はそんなわけがない。

誰もが、一番でありたいと思うはずなのだ。

だからなのだろう。

そんな顔をするのは。

「終わったよ。何もかも、全て終わった。だから、今日からは、二人の時をつむごう?」

でも、やっぱり私はそんな表情をして欲しくはない。

自分勝手だけど、彼女には幸せな顔をしていて欲しい。

私は、彼女を抱きしめるとそついう。

きざつたい言葉。

十人が聞けば十人がくさいと言っただろう。

でも、それでも、かまわなかった。

そんな事よりも、彼女の笑顔の方が大事だから。

彼女にそんな心配そうな表情をさせない事の方が大事だから。

だから、私はそういうのだ。

「きっと、俺の中に、千鶴は生きていく。あいつは、俺の鏡像だから。だから、きっと俺は千鶴を忘れない。自分自身を忘れる事が出来ないように、あいつを忘れる事はできない。だけど、今から愛するのは沙希さん、貴女だけ。今から紡がれる時も、貴女のためだけ」

絶望から立ち上がり、大空へと舞い上がる翼を手に入れた。

それは彼女のおかげ。

だから、彼女のために、私の残された時を使いたい。

「だから、そんな顔はしないで？俺は沙希さんが、愛してくれている限り、必要としてくれている限り、俺は貴女の傍にいる。愛しているから。心の奥底から、愛しているから」

そして、私はそつと彼女にキスをした。

それは誓いの口づけ。

何があろうとも、決してこの想いを変える事などしないという誓約の証だった。

あとがき（前書き）

皆さん長らくお付き合いありがとうございました。

これで二部は終わりです。

実は、この作品はかなり賛否の分かれたものだったので、編集しようかどうか迷ったものでしたが、過去は否定しても仕方がない。

というのが僕の持論ですので、そのままにさせていただきます。

今回のあとがきも、当時のままです。
それではどうぞ。

あとがき

作：おひさしぶりです。作者の霧野ニコトです・

K：アシスタントもどきのKです。

作：とりあえず、別のところで、変な事が起きてるかもしれません
が、気にしないでください。とりあえず、同時進行に行ってしまっ
たせいなんです。

K：別名考えなしとも言いますね。そのせいで、どんだけ苦労して
きたか、全く分かってないですし。

作：ああ、もう、そこ、無駄につつまないでください。無駄にめ
んどくさいんですから。

K：なんですか、そのだめ人間つぶりを暴露するような発言は。も
う少し考えてしゃべってください。

作：悪かったですね。まあ、それは、いいとして、とりあえず、こ
の作品についていろいろここだけの話をさせてもらいます。

とりあえず、感想掲示板の方でも、いいましたが、この作品は
誤算だらけの物なんですよね。

とりあえず、思った通りに、事が進んだ事がない。

ぼつとでのはずの人が、長く居座って、重要になる人のはずが、
ぼつと出に終わってしまいました。

本当なら、聡の初恋の人である、伊緒には、もう少しで張ってもらったつもりでした。

というよりも、奪い合いにするつもりでした。

本当は、伊緒も、聡の事が好きで、だけど、素直になれなかったために、告白できなかった。

そうするつもりだったんです。

それが、気がついたら、あれよあれよの間に、おかしい方向に行ってしまった、

気がついたら、ほんわかムードとは程遠い、シリアス路線になってしまいました。

これじゃ、前回言ってた事とは、真逆じゃないか。

内心、ずつとつっこみ続けましたね。でも、まあ、逆に、こうしたおかげで、全てが

すつきりしたと言つのもありますね。

とりあえず、ほとんど、聡に関する過去はありません。

せいぜい、母親との間の事がちょこちよこある程度です。

それを、考えると、これはこれで、ありかな、と思います。

K：まあ、これで、すつきりしなかったら、それこそ、大問題ですけどね。

作：とりあえず、そこ、無駄口を叩く暇があったら、沙希さんを見習って、自分を磨きなさい。

K：ふん、そう言う貴方こそ、男を磨いたらどうなんですか？

作：うう・・・ま、まあ、それは、いいとして、これからの事です
が、とりあえず、これで、もう終わりです。

長編でかけれる事はないと思います。

まあ、思ったって、ちよろつと書く事があるかもしれませんが、
それでも、たいした量には、

ならないと思います。とりあえず、たまに短編を書く程度、そ
れぐらいに思っておいてください。

まあ、もちろん、皆さんからの要望が強ければ、続きを書きま
すが。

とりあえず、いくらでも、ネタはありますので。

K：そんな事言って、今、連載してるので、ぎりぎり、どうにも
できないくせに。

まあ、要望もないだろうとたかをくくってるから、そんな事も
言えるんだろうけど。

作：そこ、性格疑われるような事言わないでください。

まあ、とりあえず、これにて、氷の華は終わりです。

ここまで、お付き合いありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8778p/>

氷の華 ～ 誓約のノクターン～

2011年3月22日15時38分発行